
ウルトラマンイオ

漂流者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラマンイオ

【Nコード】

N5786E

【作者名】

漂流者

【あらすじ】

新たな地球の守り手となるべく地上へ降り立ったイオ。だが、なにかがおかしい。兄弟達を守ってきたのは本当にこの星なのか？正統派ウルトラストーリーをお届けします。

1-1「イントロダクション」

漆黒の宇宙空間に時折り閃光が走り、争う声が聞こえる。それは三人のウルトラ戦士が何者かと戦っている姿だった。

「ハッ裂き光輪！」

ウルトラマン。

「アイスラッガー！」

ウルトラセブン。

「スプリット・ブレイク！」

ウルトラマンやウルトラセブンと共に戦うもう一人の戦士は全身が真っ黒な見知らぬウルトラマンである。三者三様の飛び道具を一斉に打ち出すウルトラ戦士の三人。そしてウルトラ戦士達が戦う相手とは、人型でまだら模様の異星人ただ一人。その異星人は平べたい紙の様に薄い体をくねらせて、ウルトラ戦士達の猛攻を懸命にしのいでいる。

「ダメだ、掴み所がない」

アイスラッガーを受けとめながらセブンの難色を示す。

「隊長。もう一度、もう一度だけお願いします」

その身を黒く染めたウルトラ戦士がウルトラマンに嘆願する。

「何をするつもりだ、フォボス」

「奴を捕えます」

「出来るのか？」

「今の私ならおそらく」

「わかった、やってみよう」

ウルトラマンが承諾する。フォボスと呼ばれたウルトラ戦士はセブンに向かってうなずく。同様に相槌を打つセブン。そして異星人を取り囲むようにして三方向に散るウルトラ戦士達。

「スペシウム光線！」

口火を切って攻撃をしかけるウルトラマン。

「ワイド・ショット！」

たたみかけるようにしてウルトラセブンの必殺光線。だが異星人は伸縮自在の体技をもって絶妙のタイミングで逃れようとす。

「逃がさん！」

いつの間にか異星人の真下に潜りこんでいたフォボスが異星人を捕まえた。が、同時にセブンの必殺光線の直撃を食らってしまう。

「うぐっ！」

「フォボス、無事か！？」

全身を焦がすフォボスの安否をセブンが確認する。

「気絶しそうだ。だが、ついに掴んだ好機だ、絶対に逃さん！」

捕らえられた異星人はフォボスから逃れようと薄い体を四方八方に収縮させている。

「むん！」

フォボスが気合いを込める。すると異星人の体が徐々にフォボスの体に張り付いていく。心なしか周囲の空間までフォボスの身体に吸い込まれてゆく様に見える。

「覚悟しろ。スミソナタス！」

黒をまとっていたフォボスの体が光を帯びはじめ、元々のものだと思われるウルトラ戦士独特の色調とラインが浮かびあがる。

「メルト・ダウン！」

フォボスの体から大量の熱が放出される。フォボスの腕の中で溶けていく異星人スミソナタス。もの言わぬ異星人だが、まるでうめき声が聞こえてくるかのような光景だ。

「くそっ、限界だ」

スミソナタスの体が溶解しきらない内に光を失うフォボス。うなだれた腕の中から体の体積を半分にしながらも逃げていくスミソナタス。

「フォボス！」

セブンが抜け殻のようになったフォボスに肩を貸す。隊長格のウルトラマンは異星人スミソナタスを追いかける。その時……………。

ギギギギイ〜〜〜。

何もなかった筈の宇宙空間が裂け始め、異次元の扉が出現した。スミソナタスはその空間の裂け目に迷わず逃げこんだ。

「これまでか……………」

追撃をあきらめ、異次元の入り口で立ち止まるウルトラマン。そのウルトラマンを押し退け異次元の裂け目に足を踏み入れようとするフォボス。

「待て、フォボス！その中では我々は存在すら出来ない。おそろく君も……………」

フォボスを引き止めようとするウルトラマン。その言葉を遮るようにフォボスが口調を荒げる。

「私は異次元人に寄生されている！私が存在できないなら奴も死に絶えるはず。問題は自力で奴を排除できない事にある。ならば今、この機を逃す訳には行かない！」

「しかし……………」

困惑するウルトラマン。

「私がこの次元に存在する事自体が驚異なのだ。行かせてくれ」

ウルトラマンの腕を掴み必死に訴えるフォボス。沈黙するウルトラ兄弟の二人。

「隊長、セブン。世話になった感謝する。ただひとつ気掛かりなのは息子の事……………」

「イオが」

セブンが心中を察して答える。

「息子には私と同じ血が流れている。私と同じ運命を辿らせたくない。頼む！見守ってやってくれ！」

黙ってうなずく二人のウルトラ兄弟。

「光の戦士に栄光あれ！」

フォボスは一人、異次元空間に去って行く。そして時は流れた……………

地球に降り注ぐ無数の素粒子の中で、一際輝きを放つ光の中に彼

は佇んでいた。

「これが地球。なんてきれいな星なんだろうか」

澄んだ瞳で宇宙空間から、地球の姿を感慨深く見つめる青年の姿。彼はいつたい何者なのであろう。

「この星が一族が守り続けてきた星。これからは僕が守らないといけないかけがえのない星、地球……か」

彼は瞳を閉じると光の粒子へと姿を変え、大気圏の中に消えて行ってしまった。

夕暮れ時の住宅街。とある総合病院の前で大声でわめき散らす初老の男。そしてその対応でくたくたになっている眼鏡をかけた若い男性の看護師。

「出て来い！ この人殺し！ 娘を返せ！」

物騒な言葉をわめき散らす初老の男は、片手に金属バットを握り締め鬼の形相で怒鳴っている。野次馬の姿がチラホラと伺え、なかには写メールを片手に面白半分に見物している若者の姿もあった。

「もうお願いします、やめて下さいよ。何度説明したらわかってくれるんですか？」

眼鏡をかけた若い看護師は必死になって男の行く手を遮っている。それにたまりかねた金属バットの男は看護師のむなぐらを掴みにか

かった。

「お前じゃ話にならねってんだろ！ この野郎、おう！ 院長だよ、院長を出せて言ってるんだよ！」

勢い余って金属バットの男は看護師を押し倒した。

「あ、あ、あなたねいい加減にしないと警察呼びますよ！ あなたのやってる事は立派な営業妨害になりますからね！」

押し倒された看護師の顔つきが変わって大声でまくしたてる、そしてすっと立ち上がり男の鼻先まで迫り寄った。

「何度も言ってますけどけどね、お宅の娘さんはうちの病院で治療できるような状態じゃなかったんです！」

攻勢に転じてだいぶ早口になってきた看護師。

「他の病院で診てもらうしかないじゃないですか！ 私の言うてる事間違ってますか！」

その言葉に口ごもる金属バットの男。しかし……………。

「応急処置位なら出来ただろが……………」

金属バットの男は冷ややかな瞳でつぶやく。

「……………」

その言葉に口を開けたまま押し黙ってしまう看護師。

「お前んとこの病院が応急処置をしてくれんから娘は……………娘は……………死にしまったんだろうがー！！」

ついに男は金属バットを振り上げ看護師に殴りかかった！沸き立つ野次馬！両の手で頭を守ろうとする看護師。カシヤカシヤと惨劇の瞬間を写メールで納めようとシャッターを切る若者達。

「やめて下さい」

金属バットは振り下ろされた。だが、その瞬間、事の一部始終を見守っていたあの「彼」が金属バットを片手で受け止め、最悪の事態を防いだのだ。

「落ち着いて下さい、同じ人間同士……………話しあえばきつと解りあえるはずです」

金属バットを振り下ろした男はしばらくの間、肩で息をしながら血走った目で看護師を睨みつけていた。

「違うんだ……………。俺は聞いたんだ」

少し落ち着きを取り戻した男はそう言うのと金属バットを手から放し、惨劇を未然に防いだ彼の顔に目をやった。

「う……………！！」

何かを語りだすかに思えた男だったが彼の顔を見た瞬間、驚きの表情を見せて押し黙り、一目散に逃げ出した。

「チエツ！つまんねえ」

舌打ちする若者に呆然とする野次馬、そんな中、彼だけは素早く男の後を追った。

「何を聞いたんですか？ 逃げないで下さい！」

人気のない土手まで逃げた後、男は力なく座りこんだ。

「どうして逃げるんですか？ 何か言いたい事があつたんじゃないんですか？」

ゼイゼイと息を切らせて、へたりこむ男の肩に手を乗せ、彼は諭すように問い正した。

「ハアハア、だってアンタ、ハア、アンタ、ウルトラマンだろう」

男は絞り出すように呟いた。

「な・・・・・・・・！！」

男を見つめる「彼」の顔つきが変わった。

「そういうあなたは何者です！」

正体を見破られた彼は顔をこわばらせて無理矢理、男の顔を自分の方へ向けた。

「ちょっと待ってよ、ハア、話すから、ちょっと待ってくれ」

そう言う男は彼の腕を振りほどき、座り直した。

「アンタ、俺の正体を知らないって事は捕まえに来たって訳じゃないんだよね？」

「捕まえなきゃならないような事でもしたんですか!？」

襟首を掴み、強い口調で問い正す彼。

「いや、してない。してないって、やる前にアンタが止めたんじゃないか」

彼が手を離すと男はふうと一息ついた。

「俺の正体はイヤー星人、この惑星での名前はナカノタツオってんだ。アンタは？」

「………有野^{アリノシンジ}真実………です」

ナカノはふうんと小さくうなずいた。

「俺らイヤー星人はね、星から星へ延々と寄生を繰り返している流れ者、渡り鳥」

ナカノは夕陽を見つめながら語り始めた。

「俺らはね、同種族同士では繁殖する事が出来ないの。だから嫁さん探しは大変、出張」

「じゃあ地球には繁殖が目的で……」

シンジの問いにナカノは軽くうなずき、言葉を続けた。

「まあね。そうでもしないと絶えちゃうから、お家がね」

ナカノがシンジに笑いかけた。シンジは、この人の良さそうないやー星人に心を開き始める。

「それから困った事に俺らは一組の親から子供一人しか作れない種族なんだよね。だから常に子孫存続の危機にある訳」

ナカノは淡々と話を続ける。

「だからさ。俺の場合、娘を失っちゃったから全て終わり、ご破算。先祖代々つないできた生命の輪が途切れちゃったの。分かるかなあ？ けっこう重たい話よこれってさ。まあ地球人だって同じなんだと思うけどね」

シンジは神妙な面持ちで話を聞いている。ナカノはポケットから煙草を取りだし、火をつけた。

「おとといの晩にね、娘が原因不明の発作を起こして救急車に担ぎこまれちゃったのよ。こんな事初めてだったけど、きつと助かると思ってたんだよね。地球人の事、信用しすぎてたな」

ナカノは首をひねってみせた。そして何かを思い出すかのように指折り数え始めた。

「うーん15だったよな、15軒！ 15軒だよ。なんだと思う？
ねえ」

ナカノの問いかけにシンジは首を横に振る。

「娘がね、たらいまわしにされた病院の数……ひどいよね」

ふいにナカノの口調に怒気が混じった。

「救急車の中でだんだん発作がひどくなってね、その内、震えだしちゃってさ。けいれん起こして口から泡ふいて……」

ナカノの声が怒りで震えているのがシンジにも伝わってくる。

「そんな状態で何時間も放つとかれて、助かると思う？ 死ぬよ、当たり前だろ！」

感情をあらわにし、煙草の煙を深く吸い込んだ後で河原に投げ捨てた。

「でもさ、どの道、助かんなかったと思うよ。いくら地球人になり済ましてても中身は宇宙人だからね。そう思うとあきらめもついた。たださっきの病院、あそこの院長、あいっだけは許せなかった」

そう言っただけでシンジの顔を見上げた。そこには、こぼれるままの涙を拭おうともせず、静かに耳を傾ける男の顔があった。ナカノは少し驚きの表情を見せたが再び前を向き、喋り出した。

「俺らはね、地球人に比べて耳がいいんだ。聞きたくない事まで

聞こえてしまうのさ。それであの病院に着いた時に真っ先に院長の怒鳴り声が聞こえてきて、もう眠いから他の病院に回らせて看護師に指示を出してたんだよ」

忌々しい過去を思い出し、憤慨するナカノ。

「ふざけるなって思ったね、これが命を救う仕事をしてる人間の言葉なのかって。その言葉が耳にこびりついてて、もう居ても立ってもいらなくて。気が付いたらバット片手にあの病院の前に立つてたって訳。……とまあ、まあこんな感じかな」

そこまで言うとなカノはおもむろに立ち上がり瞳を閉じた。そして一瞬眩い光を放つと本来の姿に戻っていた。「イカルス星人」と同じ祖先から進化したイヤー星人はイカルス星人に非常に酷似した容姿をしていた。大きな耳に太い首、ただイカルス星人と違うのは体の線が細く長い体毛に包まれているという点だろう。

「ありがとうウルトラマン。最後に君に出会えて本当に良かった。君の涙が俺の心のわだかまりを全て洗い流してくれたみたいだ。……今はなんだか心がとても清々しい」

そう言つてイヤー星人はシンジに握手を求めてきた。

「……………」

シンジは涙を振り払い、無言のまま力強く握手を返した。

夕陽が沈み、星々が瞬き始めた空にイヤー星人の宇宙船が舞い降

りて来た。

「俺はこのまま娘と一緒に宇宙のどこかにいる仲間を探しに、この惑星を去ろうと思う」

そう言つとイヤー星人の体が宙に浮き始めた。

「最後に一言だけ君に助言をしておくよ。地球人は善人の数だけ悪人も存在する生き物。俺のようにまともに接して嫌な目に遭う事もある。だから本当の心はどこに有るのかって事を常に考えて行動する事。まあ君ならきつとうまくいくと思うけどね」

無言のまま何度もうなずくシンジ。

「何か偉そうな事言っちゃったね、じゃあ、さよなら、ありがとう」

宇宙船に吸い込まれるように消えていくイヤー星人の姿。シンジは宇宙船が見えなくなるまで夜空を見上げていた。

1 - 2 「寄生」

大気圏外に達したイヤー星人の宇宙船内。娘の亡骸を静かに見守る本来の姿に戻ったナカノ。娘は地球人の姿のままだ。

「ごめんなあ、お父さんお前を守ってやれなくて……………」

イヤー星人ナカノがそう口にした時だった。突然娘の亡骸に異変が起こった。土色だった顔に赤みがもどり、呼吸を始めたのだ。

「さおり！沙織里い！」

身を乗り出してカプセルの中に横たわる娘の名を連呼するイヤー星人。そして時を同じくして地球からの通信がとびこんできた。

「ガガ……………停船してください……………あなたの船体は領空侵犯を侵していますピー……………即刻停船して下さい繰り返します……………あなたの船ガガッ」

耳がいいはずのイヤー星人もこの時ばかりは、この警告的な通信が耳に入っていない様子であった。

一方、地球人に対して疑念を抱き始めた「ウルトラマン」アリノシンジは夜の繁華街を難しい顔つきで、さまよい歩いていた。

（僕がイメージしてきた地球人とは大分開きがあるようだ、もっとこの星の事を学ばなくてはいけない）

「気をつけるバカ野郎お！」

千鳥足の男性と肩がぶつかった。

「す、すみません」

即座に謝るシンジ。そして、再び歩きだしたシンジはあるものに気づき、足を止めた。その視線の先にはファミレス脇のゴミ箱を漁るホームレスの姿が……。

「あの、何をしてるんですか？」

あきらかに周りの人々と様子が違う人間を不思議に思い、シンジはたまらず声を掛けていた。ホームレスは一瞬だけ背中をびくつかせたが、構わずゴミを漁り続ける。何も言わない人間に更に興味を持ったシンジはホームレスの近くまで歩みよっていた。ホームレスは近づく足音に顔をあげ、シンジの顔を見つめる。そのあまりに冷たい視線にシンジは再び立ち止まってしまった。

（な、なんて目をしているんだ、まるで底知れない暗闇を見てるようだ）

しばしの沈黙の後、何かが空を切る音が聞こえた。

カッン！

どこから飛んできた空き缶がホームレスの頭に命中し、シンジの背後からゲラゲラとかん高い笑い声が聞こえてくる。

思わず振り返るシンジ。そこには自転車に腰かけた二人組の高校生と思しき奴らがいた。

「ウエーイ、命中ウエーイ」

脳天気の手を合わせはしゃぐ高校生。ホームレスの方は頭を抱え、うずくまっている。

「何をするんだ君達！」

あまりの出来事に動揺し、声を震わせるシンジ。高校生の二人組は悪びれた様子もなくキョトンとしている。シンジはその姿に怒りを押し殺しながらも、ホームレスの身を案じてそばに駆けよる。

「大丈夫ですか」

しゃがみこみ、様子を見ようとするシンジ。しかし……。

「うるせえ！ どっか行けよお！」

ホームレスはまるでうるさい蠅を追いつかのようになり、手を振り回し始めた。

「……………」

どうして良いのか分からず立ちつくすシンジ。そこに、またしても空を切つて飛んでくる空き缶。

ゴンッ！

今度はシンジの肩口に当たった。飲みかけだったらしく、シンジのシャツの色がコーヒーの色に変わる。

「だあゝ、はずしたゝ」

「惜しつす惜しつす」

罪の意識が無いどころか、当人達にとっては只の遊びでしかないようだ。

（理解できない・・・・・・・・本当にこの惑星の人間を守らなくてはいけないのか？）

真顔になったシンジは高校生に近づいていく。

「切れてんじゃねーよ、バーカ」

「死ね、死ね」

途端に悪態をつきながら逃げ出す二人組。その時、遙か上空で何かが光った。確認する為、目をこらすシンジ。

「・・・・・・・・・・！」

見覚えのある物体に驚くシンジ。なぜなら先程宇宙へ旅立ったはずのイヤー星人の宇宙船が白煙に包まれ墜落していく姿が確認できたからである。

（一体何が起こったんだ？）

シンジは墜落先を目で追い、駆け出した。

住宅街からだいぶ離れた、緑生い茂る山中にイヤー星人の宇宙船は墜落、炎上していた。

「ナカノさん！ ナカノさん！ いるなら返事して下さい！」

炎上する宇宙船の破片を掻き分けて必死になってイヤー星人を探すシンジ。

「・・・・・・・・ここだ。こ、ここにいる・・・・・・・・」

力なく聞こえてきたイヤー星人の声。シンジは即座に反応し、声が聞こえてきた方向に向かう。そこには計器に挟まれ、息も絶えだえのイヤー星人の姿があった。

「しっかりして下さい！ 何があったんですか？」

シンジは計器を持ち上げ脇へ放り出す。イヤー星人の腹部からはおびただしい血が流れている。

「やられた、レーザー衛星だ。領空侵犯って言うてたな・・・・・・・・
・来たときはあんなの無かった筈なのに」

「レーザー衛星・・・・・・・・」

シンジは愕然とした。何の罪もない弱者をいたぶる。先程のホームレスと高校生の構図と今の状況が何ら変わらない事に気付いたか

らである。

「それよりシンジ君、喜んでくれ・・・・・・・・娘が、娘が生きていたんだ」

そう言ってイヤー星人は娘が横たわるカプセルを指さした。

「もう喋るのはやめて下さい、分かりましたから」

シンジはイヤー星人を抱きかかえ・・・・・・・・泣いた。

「どこまでも優しい男だな、ありがとう・・・・・・・・俺は安心して死んでいける・・・・・・・・む、娘を・・・・・・・・」

そこまで意思を伝えるとイヤー星人ナカノは力なく、こと切れてしまった。

「この親子が何をした・・・・・・・・誰かに危害を加えたか、存在するだけで目障りだというのが」

深い悲しみがシンジの心を支配する。

ガシャンッ！

いきなりカプセルが割れ、中からナカノの娘「サオリ」が這い出てきた。振り返るシンジ、そして戦慄が走る。

「お前は何者だ」

シンジはそう問いかけると、ナカノの遺体を床に降ろして立ち上

がった。

「シャー、シャー」

サオリはすでに地球人でもイヤー星人でもなかった。辛うじて人間の姿を留めてはいるが露出した表皮が避け、そこから幾つかの触手が伸びている。そして二足歩行を完全に捨てさり、猫科の動物のように四足で獲物を狙う体制をとっていた。

「そうか、お前が原因か。お前が体内に寄生していたから死んだという訳か」

サオリに寄生していたのは宇宙細菌「ダリー」宿主から栄養を吸収し、際限なく成長する恐ろしくやっかいな細菌で、寄生されたが最後、万に一つも助かる見込みはないと言われている。他の惑星に寄生しなければ生きていけないイヤー星人が自らも寄生されていたとは、なんとも皮肉な話である。

「キシヤー！」

ダリーは人間であつた口から何本もの触手を伸ばし攻撃をしかけてきた。

「うっ！」

一瞬たじろぎはしたものの、シンジの左腕が光を放ち、向かってきた触手を全てなぎ払う。

「シャウンッ」

思わぬ反撃を喰らい、その身をひるがえすダリー。

「言葉も理解できない化け物め！」

力の差を思い知らされたダリーはきびすを返して船内から逃げ出してゆく。切断された触手を横目にしてシンジもまた、ダリーの後を追いつつ船外へ向かった。

「どこだ、出てこい！」

宇宙船の周囲の雑木林に火の手が回り、燃え盛る炎の中。シンジは注意深く辺りを見回してみた。すると、ちょうど炎がとぎれた先で何やら明滅する物体を発見した。ダリーである。しかし、先程の姿とはまた違って今度はイヤー星人の姿でよつんばいになっている。そして体内の光が明滅する度にどんどん体が巨大化していく。どうやら地中の養分を自らの体に取り込んでいるようだ、幾つもの触手が地面に刺さっている。

「僕は許さない、イヤー星人の親子を破滅へと追いやったお前を。そして訳も分からず弱者を虐待する……地球人も！」

シンジの目に憎しみの炎が灯る。

「イーーーーオーーーーー!!」

シンジの両腕が発光する。そして腕を交差させながら高々と天へと突き上げた。薄暗い山中に、まばゆい光を伴い「ウルトラマンイオ」がその姿を現した。少しつりあがった瞳、うっすら髭を生やし

たような頬、そして一番の特徴は斧状のとさかが二本も生えている頭部である。光の巨人イオの出現にも動じないダリーは機能していないはずのイヤー星人の耳をピクピクさせながら、なおも自らを巨大化させる為養分を吸収している。

（無駄な事を）

イオはダリーの体を地面から引き離しにかかった。

バリバリッ！

ちぎれていく触手、悲鳴をあげるダリー。そんな事はおかまいなしにイオはダリーを後方に放り投げる。しかし驚くなかれダリーは空中で一回転すると猫のように着地を決めてみせたのだ。イヤー星人の体で四足歩行をしている為、その姿はまるで本物の猫のようである。

（何！）

ダリーの俊敏な動きに戸惑うイオ。その一瞬の隙を逃さず大木の幹のような太い腕で飛びかかってきたダリー。

（くっ、こいつ）

思わぬ怪力に翻弄されるイオ。数秒の膠着状態が続いた後、ダリーの脇腹から無数の触手が伸びてきてイオの体に素早く巻き付く。そしてそのまま後方に倒されてイオはまったく身動きが取れない状態になってしまった。

「シャウッ」

ダリーは小さく鳴き、すぐさま次の行動に移る。イヤー星人の尻の部分からダリー本来の尻尾と思われる部分が伸びてきた。鉛色で硬い鱗に覆われ、先端に鋭いハサミがついた尻尾である。

ヒュッ、ヒュッ。

伸縮自在とも思われる程の長い尾を振り回し、先端のハサミがイオの顔面に狙いを定めてきた。

（なめるなよ！）

ダリーの攻撃より早く両腕を発光させ、脇腹の触手を切断！そして悲鳴をあげ上体をのけぞらすダリーの腹に右足をあてがい、思いきり蹴りあげた。

「シャオンッ！」

もんどりうつて倒れるダリー、その隙に立ち上がり間合いをとり直すイオ。睨みあう両者。

「シャウッ！シャウッ！」

ダリーは尻尾を使って何度も威嚇する。

（なんだ？）

地面でなにやらうごめく物があるのでふと目を落とすと、先程切り落とした触手がまだ動いており思い思いの方向へ逃げようとしている。

（危険な奴だ、全てを塵に変えてやるぞ）

ダリーはイオの視線が自分から離れたのを察知し、攻撃体勢に入る。本体はイオの足元をめがけ突進しつつ、尻尾のハサミを大きく開き、放物線を描きながら頭部を攻撃。かなりそのつない攻め方をしてきたかに見えた、が……。

（甘い！）

イオは左の手刀で尻尾を切断！そして右腕でダリーの頭を脇に抱え込んだ。いわゆるヘッドロックの状態である。それから切断したハサミを手にするとヘッドロックを解除し、ダリーの首を挟みこむようにして大きく広がったハサミを思いきり地面に突き刺した。

「シャウウッ」

自らのハサミで首を固定されて動きを封じられたダリー。前足で必死になってハサミを掻いている。哀れな姿である。

（終わりだ！）

イオはダリーから少し距離を取り、片足を立ててしゃがみこんだ。そして発光している両腕を高々と振り上げ、気合い一閃！地中深く突き刺した。

「メルト・ダウン！！」

次の瞬間イオの体全体がスパークし、辺り一面が物凄い熱で包まれた。

バチバチッ！ バチバチッ！

断末間の悲鳴をあげながら溶解していくダリー。むろん切断された触手やイヤ―星人の宇宙船も溶けてゆく。イオを中心とした半径三キロの動植物が全て塵となった。戦いを終えて光を失い、ガツクリと倒れこむイオ。

．．．．．そして静寂と暗闇が山に戻ってきた．．．．．。

夜明け近くに連絡を受けた地球防衛隊「ガイズ」のユニフォームを着た隊員二名が、まだ蒸せかえる山中に到着した。

「なんだよ、この有り様は」

「うわ、すごい．．．．．」

派遣されてきた隊員は男女混合の二人組である。

「放射能レベルは微量、人体への影響はないかと思われます」

女性隊員が地面に機器をあてがい男性隊員に報告する。

「しかしこりゃただ事じゃないな。サキ、調査隊派遣の要請を頼む」

「わかりました、連絡します」

その異様な光景に圧倒され呆然とする男性隊員。女性の方は無線で連絡を取っている。と、そこへ一人の男性が歩いてきた。シンジである。突然現れたその姿に驚くガイズ両隊員。

（こんな場所に、何者だ？）

すかさず光線銃に手をやり、身構える男性隊員。

「止まれ！ 何者だ！」

ガイズ隊員の制止にまったく耳を貸さず、歩みをとめないシンジ。

「止まるんだ！ 聞こえないのか！」

ついには光線銃を抜き、構えるガイズ両隊員。その行為に顔を歪めるシンジ。

「撃ちたいなら撃てえ！！」

シンジはガイズ隊員を睨みすえ、吐き捨てるように言い放った・・・。

2 - 1 「迷走」

「撃ちたいなら撃てえ！！」

そう言い放つシンジの剣幕に硬直する男性隊員。その隊員の脇を抜け、シンジは物言わず立ち去ろうとしていた。

「待ちなさい！本当に撃ちますよ！」

女性隊員がシンジの背中に向かって照準を合わせる。その声に我に返った男性隊員があわてて制止する。

「やめろ、一般人だつたらどうするんだ！」

「一般人なわけありません！」

「いいからとにかく銃を降ろせ」

男性隊員の言葉に渋々従う女性隊員。男性隊員は小さく頷き、再びシンジに視線を戻す。

「きみ、お願いだ。ちょっと話を聞かせてくれないか？」

ガイズ隊員のやり取りの中、無言のまま下山の道に向かうシンジ。そして不思議な事に朝もやに溶けるようにして、その姿を消した。

「消えた？」

「消えましたね」

狐につままれたような顔をしてお互いの顔を見合わせる両隊員。

ガイズ・ジャパン総本部の司令室。シンジと遭遇した隊員二名が事例報告に訪れていた。

「すると何かね、コンノ君。その男性は突然現れて、また突然消えたと、そういう解釈でいいのかな」

「はい……、まあ早い話そうなりますかね」

コンノと呼ばれた男性隊員の頼りない返事が返ってくる。

「それで、その謎の男性が今回の事例に何か関係しているのではないか、とまあこういう訳だね」

「はい、そういう事になります」

コンノ隊員は朗らかに答える。

「当たり前だ、ばか者！」

机を叩き一喝する司令。目をまるくするコンノ隊員、女性隊員は終始目線を床に向けている。

「いいかね、宇宙船が墜落した現場が約三キロ四方に渡って焼け野原のようになってるんだぞ！ そんな場所に偶然居あわせる人間がいると思うのかな？ 例え宇宙人でなくとも重要参考人である

という事が、君には分からないのかね」

お目玉をもらい小さくなるコンノ隊員。その姿を見てクスクスと笑う女性隊員。

「笑ってる場合ではないですよ、ミツウラくん」

「失礼しました」

顔をあげるミツウラ隊員。

「で、どうなんだね君の見解は？」

「発砲する時間がありましたので、威嚇射撃で様子を見る事は出来たと思います」

キッパリと言いきるミツウラ。その発言に思い切りうるたえるコンノ。

「ほほう、では何故撃たなかったのだねコンノ君」

「えゝそのゝ何て言いますが、まさか消えていなくなるなんて思わなかったものですから」

必死に取り繕うコンノを冷たい眼差しで見下ろす司令。

「びびってました」

親指でコンノを指し、ミツウラが口を挟んできた。

「な、何て事言つんだよ、お前は！」

とつさに反論するコンノ。

「事実です」

「事実じゃありません、けっして事実じゃありません」

コンノは目くじらを立てて怒りだし、懸命に否定する。

「れっきとした事実です。この、チキン野郎」

司令そつちのけで口喧嘩を始め出した二人。その姿に頭を抱える司令。

「君達いい加減にしろ！」

たまりかねた司令の一喝で直立不動になる二人。

「とにかく君達二人は実際に顔を目撃しているんだ、モニタージユを作成して必ず探し出せ。……わかったな！」

「了解！」

司令室を立ち去りながらも睨み会うコンノ、ミツウラの両名。その光景を遠目にして司令はため息をついた。

「大丈夫か、あいつ等」

市内の公立図書館。シンジは地球人の文化や歴史について学ぶべく、何十冊もの書籍を脇に置き、超速で読破していた。

（これはヒドイ、ほとんど戦争の歴史じゃないか）

落胆の色で次の書籍に手を伸ばす。兵器について書かれた書である。パラパラとめくり始めるシンジ、だんだんと陰しくなる表情、そしてあるページで手が止まった。

「か、核だつて！」

思わず大声を張り上げてしまったシンジ、周りの人間が一斉に振り向き、冷ややかな視線を浴びせる。

（うつ………またあの嫌な目だ、やめろ、その目で見るのはよせ！）

シンジはその場にいたたまれなくなり、そそくさと書籍を片づけ出す。最後の一冊を戻しにきた棚で女性が棚の一番上の書籍に手を伸ばし必死に背伸びをしている。その微笑ましい姿がシンジの顔に笑みを戻していた。

「どれを取ればいいですか？」

「あつ、すみません。その、はい、それを、ありがとうございます」

「易学」と書かれた書籍を渡してあげるとシンジはその場を立ち去ろうとした。

「あの、ちょっと待って下さい」

女性は心配そうな顔をしてシンジを呼び止めた。

「えっ？」

何事かと思い、振り返るシンジ。

「あの、何かとても思いつめた顔をしています。私でよければ話を伺いますが」

「は？」

シンジはこの不思議な女性に興味を持った。

「私こう見えても占い師の仕事をしているんです。まだ未熟者なんですけど、大抵の事は分かるんですよ。例えばズバリあなた！」

そう言って自称占い師の女性は人さし指でシンジの顔を指す。

（ま、まさか僕の正体を？）

ドギマギしながら次の言葉を待つシンジ。

「ズバリ道に迷ってますね、これから先どうすれば良いか、とても困ってます」

シンジはホッとして安堵の表情を浮かべ、口を開く。

「びつくりさせないで下さいよ」

「あれ、違いました？」

女性は予想に反した反応に苦笑いを浮かべている。

「いえ、当たってます。すごい、どうして分かったんですか？」

シンジは女性の両肩を掴み興奮した表情で問い直す。

「オホンッ」

どこからか聞こえる咳払い。

「あ、あの～ここでは何ですので私の仕事場に……………」

恥ずかしそうに顔を紅潮させてうつ向く占い師の女性。

「全くコンドウさんも簡単に言ってくれるよなあ」

「誰かさんのとばっちりでこっちはいい迷惑です」

謎の男「シンジ」搜索の為、ガイズ特殊車輛に乗り事件現場から一番近い市内までやって来ていたコンノ、ミツウラの両隊員。

「なに、また蒸し返そうって訳？」

「いいえ、それよりもっと真剣に探して下さい。私は運転にも、

集中しないといけませんので」

「探してるよ、たださあ、そんな簡単に見つかる訳ないじゃない。その事を言ってるの」

「それはそうですけど、女の人のおシリばっか見てても見つかりませんよ」

「ああそうですかと・・・・・・・・・・」

コンノはカーステレオのリモコンを手にして含み笑いを浮かべる。

ギャギャーン!!

突如、大音量で鳴り響くカーステレオ。

「何するんですか、いい加減にして下さい」

しかめっ面をしてスイッチを切るミツウラ。

「ふふふ」

笑いながら再度スイッチを入れる子供のようなコンノ。

「やめて、もう、やめろって、この野郎!!」

右手でハンドルを操作しながら、左手でコンノをド突くミツウラ。

「へへへ」

馬鹿になったふりをしてリモコンを離さないコンノ。

「もう分かった。降参、降参です!」

白旗をあげるミツウラ。ようやくスイッチを切るコンノ。

「分かればいいんだよ、分かればさ」

一悶着終えて小康状態になる車内。

「全く、いい年して恥ずかしくないんですか?」

「あれ? 今さ、降参って言わなかった? 降参って」

「んゝもう殺したい」

コンノのへらず口に呆れ果てるミツウラ。

「言っただしょ、この口で!」

ミツウラ隊員の唇をつまんで引っ張る大きな子供。

「やめろって、事故るって言ってるでしょ、もう!」

首を振りコンノの手から逃れるミツウラ。前を向き腕組みをするコンノ。そうしてようやく車内が落ち着いた。

「たくう」

同時にぼやき、キッと睨み合う両者。

「フン！」

同時にそっぽを向く二人。しばらくの間沈黙が続いていたがコンノが何か発見し、そわそわしはじめた。

「あー！　おー！」

大声を出すコンノ、いきなりの大声にミツウラは慌てて急ブレーキを踏んだ。

「もう！　一体何なの？　事故るって言ってるでしょ」

うんざりした様子のミツウラ。

「馬鹿、いたんだよ。アイツがいたんだって」

かなり慌てふためいた様子で前方を示すコンノ。

「どこです、いないじゃないですか」

コンノが示す方向には確かに誰もいなかった。

「その角、その角曲がって行った。女と一緒に」

「女の人は綺麗でしたか？」

「もうすごい美人。オッパイなんかこんな大きくなって、ってコラ！何を言わせるんだ。何を」

「なるほど。オッパイに見とれて横に男がいたから、なんだ野郎連れか、どんな野郎だ、うらやましいな。と、思つて男の顔を見たら、あの男に似ていた、という訳ですね」

「おい」

さりげなくつつこむコンノ。

「綺麗な女の人と一緒にいた。という事で信憑性はかなり上がりましたが、八割方間違いです。こんな簡単に見つかる訳がありません」

「それもそうだよな、こんな簡単に見つかったら誰も苦労しないよな、つて馬鹿あー！」

今度はのりつつこみで激しくつつこむコンノ。

「間違いないって、アイツだった。かなりインパクトあったからちゃんと覚えてたみたいだ」

「そうですか？？ まあそこまで言うなら行きましようか」

「いや待て。サキは車で待機してコンドウさんの指示を仰いでくれ。俺はとりあえず尾行しながら連絡を取る」

「気をつけて下さい。女の方も何者かわからないですからね」

「おう」

男らしく相槌をうち、元気に飛び出して行くコンノ隊員であった。

シンジと占い師の女性は、まるで仲のいいカップルのように、歩道を歩いていた。

「あの、ミエコさん。ひとつ聞いてもいいですか？」

「なにかしら？ 私に答えられる事なら何でも聞いていいわよ」

「ええと、弱い者をイジめる人間ってどう思いますか？」

「んー、いきなり難しい問題ね。シンジ君はどう思っの？」

「僕は……僕は絶対、許せん！」

シンジの返答に悪戯っぽい目を向けるミエコ。

「そうね、シンジ君はそういうタイプよね。私は好きよ、そういう真っ直ぐな人って」

その笑顔に少し照れた様子のシンジ。

「でも許せないからって、いじめる側をシンジ君がこらしめても果たして問題は解決するかしら？」

「それは………」

ミエコの質問に逆に考えさせられてシンジは返答に困ってしまう。

「その場は収まるかもしれないけど、根本的には何も解決はしないわ」

「じゃあどうしたら」

「いじめる側といじめられる側って実は本質は一緒なの。どちらも心が健全じゃないから問題が起きちゃうのよ」

「心、ですか」

「んー、簡単に答えは出ないけど、表面だけに目を向けないって事が私は大事だと思うわ」

（本心はどこにあるのか考える事が大事）

シンジはイヤー星人に言われた言葉を思い出していた。

「シンジ君、どうしたの？ いきなり難しい顔して」

「いえ、すみません。その通りだと思います」

「怪しいなーちゃんと聞いてたのー」

「聞いてます、ちゃんと聞いてましたよ」

クスクスと笑うミエコの笑顔はシンジの心を癒していた。

シンジとミエコを尾行するコンノは、二人が進む方向を見定めへ

ツドセットを装着した。

「サキ、聞こえるか？ 二人は現在雑居ビルの密集しているセンター街へ向かってる。コンドウさんからの指示は？」

「えー、司令の言葉です。でかした！ コンノにしてはよくやった。そのまま尾行を続けて潜伏先まで突き止めるように、ポテチンとの事です」

「ポテチンってなんだよ……ん？ コンドウさんがそんな事言う訳ないだろ、サキ、この野郎、お前」

「コンノさん、静かに、気付かれますよ」

「ああ、そうだな」

「とにかくセンター街ですね、先回りしておきます」

「よし、頼む」

通信を終えて歩き出そうとしたコンノの前にサングラスをかけ、スーツ姿の大柄の男が立ちふさがった。不敵に笑っている。

「ん？ なんだ、お前」

コンノがそう言うと同時に、背後から同じ扮装の男が「ダブル・ハンマー」をコンノの後頭部に打ち下ろした。

「ぐおっ！」

鈍い衝撃を後頭部に受け、そのまま前の男に寄りかかるようにして崩れ落ちるコンノ。

（しまった、何者だ………）

コンノは薄れ行く意識の中、必死に大男の足を掴みにかかる。しかし、簡単に振り払われ足蹴にされて、そのまま気を失ってしまった。大男二人組は薄笑いを浮かべ、コンノが追っていたシンジ達の後をつけて行く。

2 - 2 「分岐」

センター街に到着したシンジとミエコは、多くの若者が行き交うメインストリートの中の小さなビルに入って行く。いくつかのテナントが入っており、そのビルの看板に「熱田美恵子 占いの館」の文字が書かれていた。

「さあ、シンジ君。徹底的に占ってあげるわ」

シンジはなにやら占いの道具が置かれたテーブルの前に座らされた。

「えーと、生年月日と名前は聞いたから、それじゃ手相を見せてね」

ミエコは躊躇なくシンジの手を取り、手相を見始める。

「うーん、運命線が大きく二つに分かれてるわね」

ミエコはそうつぶやくと、シンジの顔をジッと見つめる。照れて視線をそらすシンジ。

「大体分かったわ」

ミエコは、テーブルの上に置かれた占い道具の中から水晶玉を掴んでから。

「これが良さそうね」

そう言つて水晶玉をシンジの目の前に置き、両手をかざして中を覗きこんだ。

「コンノさん！コンノさん！しっかりして下さい」

連絡が途切れたコンノを捜し出し、正気づかせようとしてミツウラは必死に呼び掛けていた。

「ん、サキ。あれ？ どこだ、どこ？」

「どこだ、じゃないって」

気がついたコンノを確認して全身の力が抜け、安堵の表情を浮かべるミツウラ。

「おお！ そうか俺、誰かに殴られて・・・痛てえ。あんにやるめ」

コンノは足蹴にされた顔に手をやった。何も言わずその手をはたくミツウラ。

「ん？」

キョトンとした顔で再び顔を擦ろうとするコンノ、ミツウラは再び何も言わずにその手をはたいた。

「ちょっと、何すんの？ 怪我人だよ、俺」

「ばい菌が入ります。一応消毒してありますので」

「あ、そうなの。………」

赤くなつて照れるコンノ。

「たくゝ、何やってんですか。少しでも期待した私の身にもなつて下さいよ」

「何だ、そりゃ。お言葉ですけどね！俺だって、ただでやられた訳じゃないんです」

「期待はしませんが聞きましょうか」

興味を持ったミツウラにニヤリと笑うコンノ。

「あいつ等ともみ合つた時に発信機を取り付けてやった。モニターを見てみる」

ミツウラは車の中からそそくさと受信モニターを取り出し、電源を入れた。

「おおゝ、珍しく偉い！ 誉めてあげます」

「あたぼうよ」

お褒めの言葉を授かつてコンノは得意満面になっている。

「なるほど、そう遠くないですね。……あれ？ コンノさん、さっき誰かに殴られてって言いませんでした？」

「ん、そうそう。サングラスかけた、こゝんな大男がさあ、二人も」

「もしかして発信機付けたのって……」

「ん？ だからそいつ等に付けてやったんだよ。絶対追い込んでとっちめてやるからな」

コンノの言葉に不機嫌モード全開になるミツウラ。

「誰ですか、それ！」

「いや、俺も知らない。いきなり殴られた訳だし」

「んも、結局あの男には逃げられた訳ですね！」

「いや、そうとは限らないぞ」

「ん？ どういう事ですか？」

期待を裏切られて口をとんがらすミツウラ。

「俺を襲った奴らも、あの男を追ってたみたいなんだ」

「へえ」

ミツウラは全く気のない返事をする。

「おいっ、ちゃんと聞けよ」

コンノが食い下がろうとしたその時。

「おい、サキちゃん」

コンノ達のいる場所へ、銃機で完全武装をした一団がぞろぞろとやって来た。

「あ、ゲンさんだ。ゲンさん、こっちだよ」

ミツウラはコンノには見せない満面の笑顔で手を振って愛嬌を振りまく。

「何がゲンさんだ。猫なで声出しやがって。ん？ サキ、お前、特機呼んだのか？」

「当然でしょ、コンノさんブツ倒れてるし、私一人じゃ危ないじゃないですか」

「いや、だからって……。んゝまあ正解だったかな」

「よう、コンノ。無事だったみたいだな」

ゲンさんと呼ばれたその男は「ガイズ」のユニフォームは着ておらず、後ろの完全武装の一団より少しラフな格好をしていた。

「どうもゲンさん、お久しぶりです」

コンノは、ばつの悪そうな顔で頭を下げる。

「最近これといった事件がなかったからな。お前、少し平和ボケしてたんじゃないか？」

にこやかに笑うゲンさん。頭を掻くコンノ。

「ゲンさん、聞いて下さいよ」。こいつ、またへマしたんですよ」

ミツウラがゲンさんに擦り寄る。

「まあ、そう言うなって。こいつはちゃんと体張って頑張ってるだよ。そうだよな、コンノ」

「いや、そうなんですけどね、なかなか伝わなくて」

「ん、まあそんな事よりよ、犯人の目星はついてんのか？」

「ええ、まあ一応・・・・・・・・」

一応と答えるコンノに冷たい視線を送るミツウラ。

「なんだよ・・・・・・・・」

全く信用されていないコンノだった。

「見えたわ」

一方、占いの館では静かに落ち着いた口調で、ミエコが鑑定の結

果を話し始めていた。

「シンジ君は今、人生の岐路に立たされてるわ。一つは平坦で真っ直ぐな道。その先には小さな幸せも待ってる。だけど機械の歯車のように、無味乾燥で同じ日々の繰り返しそれに何よりシンジ君自体は、その道を望んでいない」

シンジは真剣な眼差しで聞きいつている。

「そしてもう一つの道は、いばらの道。突き進めば、突き進むほど苦しい修羅の道。そこには幸せなんて待っていない。反逆者の烙印も押されるわ。けれども……」

思わせぶりの言い回しにシンジはゴクリと唾を飲みこんだ。

「けれどもそこにはシンジ君が望んだ真実の未来が待っている筈」

シンジを見つめるミエコ。そしてしばしの沈黙。

「そうですか、ありがとございます。多分ミエコさんの言うとおりだと思います」

険しい顔になるシンジ。

「で、シンジ君はどっちの道を選ぶつもりなの？」

その問いかけに再び訪れる沈黙。

「分かりません。答えを出すにはまだ時間がかかると思います」

「そうね、簡単に答えは出せないわ。でも選択肢を誤るとシンジ君には死が待ってるわ」

「え・・・・・・・・」

予想だにしないミエコの発言に、シンジの表情が一瞬にして凍りつく。

「どういう事ですか、それは？」

ミエコは黙ったままシンジを見つめている。

「ねえシンジ君、ここに来る前にイジメの話をしたわよね」

「はい・・・・・・・・」

「いじめられる側も、いじめる側も心が健全じゃないって言うたでしょ」

シンジは黙ったまま頷く。

「じゃあシンジ君から見て、この惑星の人間はどう？ 健全と言えるかしら？」

話の流れに不穏なものを感じ、硬直するシンジ。

「核兵器なんて恐ろしい物を作る地球人が、とても健全な心を持っているとは言い難いわよね」

（なんだ。この違和感は。目の前にいるのは誰なんだ・・・・・・・・）

占い師の発する暗示の力にシンジは半分、夢を見せられている状態に陥った。

「心を病んでいる地球人は、その内とんでもない兵器を作り出すわ。そしていじめられる側からいじめる側になったとしたら」

催眠術をかけられたような雰囲気、シンジは目を大きく見開き必死に耐える。

「平和に暮らしている他の星の人々を、あなた方は一体どれだけ守っていけるのかしら。それとも、一緒になって弱い者いじめでもするつもり？」

「ミエコさん、あなたは一体……」

金縛りにかかったように思うように動けないシンジ。

「鈍い男だね、アンタは」

ミエコは悪女のような表情を浮かべ、立ち上がった。

「こつこつ事さ」

ミエコの姿が陽炎のように、ぼんやりしながら形を変えてゆく。

シンジがまばたきをした次の瞬間には、既に首筋に冷たいサーベルが突き立てられていた。

「ま、マグマ星人！」

シンジは驚嘆した。ミエコの正体は残忍で凶悪、かつ悪名高いサ―ベル暴君「マグマ星人」だったのである。

「赤井！黒田！」

マグマ星人が誰かの名前を呼ぶ。すると入り口からコンノを襲った大男の二人組が入って来た。

そしてシンジを挟みこむように陣取って両腕を固め、シンジが身動きを取れないように拘束した。

「何をする！」

シンジはマグマ星人を睨みつける。

「別に……………」

そう言つてマグマ星人はあっさりとシンジの首筋からサ―ベルを離してみせる。

「ただ、あたし等はアンタにここで決断してもらいたいのだ。地球人を皆殺しにするか。それとも今までのように愚民どもに恩を売るか。アンタにはこの二択しか無いんだよ」

テーブルの上に腰掛けシンジを見下ろすマグマ星人のミエコ。

「そして、その答え次第ではここで死んでもらう事になるからね」

（地球人に恩を売る？　マグマ星人の言い分だと僕らの一族は地球

人の驚異から保身の為に、この星を守ってきた事になるが。いや、そんな事がある訳がない！　しかし彼女の言い分にも一理はある・・・）

「さあ、どうするんだい？　平坦な道か？　いばらの道か？」

再びサーベルを向けてシンジに詰め寄るマグマ星人。

「僕は力には屈さない！」

シンジは猜疑心をふっ切るように力強く言い放つ。

「あらまあ、随分と威勢のいい事。でもこの状況をわかってて言ってるのかしら？」

マグマ星人は馬鹿にした笑いを浮かべた。それに釣られたのか大男の二人も薄笑いを浮かべている。

「戦闘経験の乏しいアンター人が、プロの戦争屋三人を相手にして万に一つでも勝てる見込みがあると思ってるのかい」

「それは関係ない！　ただ僕はここで殺されたとしても、強要されて答えを出すような事はしない！」

「ふう〜ん、たいした頑固者だねえ。ならここで死ぬしかないね。赤井、黒田、離してやりな。こんな坊や私一人で充分だよ」

マグマ星人に促されシンジを解放する大男の二人。

「さあ、行くよ！」

マグマ星人は右手のサーベルで、シンジの真正面から斬りかかる。素早く右に交わすシンジ。まっぴたつに寸断されるテーブル。

「もう一つ！」

振り下ろしたサーベルをすぐさま振り上げ、シンジの溝落ちめがけ突き刺しにくるマグマ星人。シンジは発光させた両腕を交差させ、間一髪サーベルを弾く。そしてがら空きになったマグマ星人の脇腹へ素早く蹴り込んだ。しかしマグマ星人は体を回転させながらシンジの蹴りをかわすと、その反動を使って再びサーベルを振り回して攻撃しかけてきた。

パターン！

シンジは右足を空振りさせた状態で側面からの攻撃を両腕で受け止めたが、そのまま身体を思いきり壁に叩きつけられてしまった。

「坊やの割には、なかなかやるじゃないか」

マグマ星人は不敵な笑みを浮かべ、サーベルを舌舐めずりする。

「ミエコさん、一族同士が敵対しているけど僕にはあなたと戦う理由はない……………」

膝を立て、起き上がりながらシンジはマグマ星人を睨む。

「それでも僕を殺すというのなら……………僕は振りかかる火の粉を払うまでだ！」

強い意志を持った瞳でシンジが言い放つ。

「ほう、生意気だねえ、アンタに払える火の粉だと思ってんのかい？ まあいいさ、アンタみたいな坊やには実力の差ってやつを見せてやらないとね」

マグマ星人が左手もサーベルに変化させていく。そして両のサーベルが光を放ち出した。

「ここだ、ここだ。このビルの中だ」

コンノ、ミツウラ、ゲンさん及び特殊機動歩兵部隊の一行はミエコの占いの館が入っているテナントビルの前までやって来ていた。

「コンノ、なんか騒がしくないか？」

一同が車から降りるやいなや、ゲンさんが聞き耳を立てる。

「本当だ。何か争ってるぞ、ゲンさん踏み込みましょう！」

「よし、お前ら！ 安全装置を外して隊列を整えろ」

すぐさまゲンさんは特殊機動歩兵部隊に指示を出す。

「サキはコンドウさんに連絡、映像も出せるようにしてくれ」

「あいよー！」

サキが威勢よくあいずちを打つ。その時……。

ドガンツ！ガラガラガラ。

ガイズ一同の体勢が整わぬ内に突然テナントビルの壁が崩れ、中からシンジとマグマ星人が飛び出して来た。

「あ……！！」

ビル壁の崩れる振動と大きな音に振り返り、驚く防衛隊一同。

「あいつだ」

シンジの姿を確認したコンノがつぶやいた。

「コンノさん、あの人、あの人」

ミツウラがコンノの肩を叩く。

「ああ、わかってる、それより本部に回線を繋ぐのが先だ」

「コンノ、どうするんだ。男の方も普通じゃないぞ」

「ゲンさん、攻撃するのはちょっと待って下さい。敵性宇宙人かどうか本部に確認します」

「回線繋がりました」

ミツウラがコンノに無線を手渡す。

「そんなものがいつまで持つと思ってんだい！」

二本のサーベルで耐え間無い攻撃を繰り返すマグマ星人。シンジは発光させた腕を交差させ、必死に防御している。

（くそ、もう持たない。これ以上受けると腕がいかれてしまう）

シンジは意を決して変身する。発光させた両腕から次第に「イオ」の姿に変貌していくシンジ。その変身の瞬間をガイズのテレビカメラは克明に捕らえていた。

（あの姿は、まるでウルトラマンじゃないか。あいつはひょっとして、ウルトラマンなのか？）

変身の瞬間を目のあたりにしたコンノは無線機を片手に言葉を失っていた……………。

3 - 1 「苦悩」

「司令、映像解析が終了しました」

地球防衛隊「ガイズ」の作戦指令室では隊員達が事の成り行きに注目していた。

「一体は凶悪宇宙人のマグマ星人。もう一体は識別コード不明、一番近い種がウルトラマンという解析結果が出ました」

どよめく室内。現場から送られてくる映像を凝視しながらコンドウ司令は一言つぶやく。

「そうか、我々が追っていたのはウルトラマンだったという訳か」

「……………マジかよ」

コンノ隊員は自分の追っていた男がウルトラマンだった事に衝撃を受け、無線機を片手にしばらく呆然としていた。

「コンノ、おいコンノ！ 聞こえないのか！」

コンドウ司令の声に気を取り直し無線機を口元にあてがうコンノ。

「はい、聞こえます」

「黒い方が敵性宇宙人のマグマ星人だ。もう一人の宇宙人を援護

して、マグマ星人を仕留めろ！」

「了解しました」

「聞いてたぞコンノ、黒い方だな」

「はい、ゲンさん、お願いします」

「分かった。ただ赤い模様の奴との距離が近すぎる、何とかしてくれ」

「任して下さい」

自信たっぷりな仕事を請け負うコンノはマグマ星人に対して光線銃を構え、慎重に狙いを定めた。

「何だい、何だい、あんだだけ大口叩いておいて、そんなもんかい」

両のサーベルを巧みに操り、反撃の隙を与えないマグマ星人。その卓越した斬撃に防戦一方のイオ。

（駄目だ、速すぎてかわしきれない。一旦距離を取らないと話にならないぞ………仕方ない、ものは試しだ！）

膠着状態を打覇する為にイオはかかとで地面を蹴り、バックステップを踏んで距離をとろうとした。しかし、うかつな判断が命取りになる事を次の瞬間には思い知らされる事になる。

（うおっ！）

イオが後方に逃げた。その機を逃さずマグマ星人はイオの上半身に圧力をかけてくる。たちまち足下がおぼつかなくなり、たまらず後方に転倒してしまったイオ。とんだ失態である。

「フン、馬鹿だねえ！アンタは。勝負で後ろに退くのは一番 अच्छいじゃない事なのにさ」

間合いを取る事は叶わず、マグマ星人に「マウントポジション」を取られ、右手のサーベルを顔の真横すれすれに突き刺された。

「さあどうする？ 坊や」

絶対絶命のイオ。マグマ星人は更に左のサーベルの切っ先をイオの眉間に突き立ててきた。

（ま、負けた。……僕はこんなにも弱かったのか）

イオは自らの判断ミスを認めて敗北を悟った。だが、どんな窮地に立たされてもあきらめてはいけない。なにか手はないかとイオは頭を巡らせる。すると……。

バリバリッ！

イオのピンチを救うコンノの光線銃がマグマ星人の頭部に見事命中した。

「くっ！」

サーベルを引き抜き、素早く頭部をかばうマグマ星人。

「やってくれたね、このウジ虫が！」

イオの事はそっちのけで立ち上がり、ガイズ一同に向き直るマグマ星人。それを確認したコンノが、すかさず号令をかける。

「ゲンさん、今です！」

ドガガガガガガガガガガッ！！

一斉に発射された鋼鉄をも貫通させる鉄鋼弾の雨！そのあまりにも大量の弾丸にさすがのマグマ星人も足を止めた。

「ふざけるな、地球人め！」

激怒するマグマ星人。我に返って起き上がるイオ。

（助かった……だが彼らはなぜ、マグマ星人を攻撃するんだ）

サーベルを使い弾丸を払ってはいるが、体中から大量の血を流すマグマ星人。その光景に戸惑うイオ。そして脳裏にマグマ星人の言葉が蘇る。

（地球人をみな殺しにするか、それとも今までのように恩を売るか。そうか、これがマグマ星人の言っていた、地球人に恩を売った結果なのか！だけど、これでいいのか、僕がウルトラマンじゃなかったら……）

自問自答を繰り返すイオ。なおも止まない弾丸の雨に片膝をつき、崩れ落ちるマグマ星人。しかしその表情は何かを狙う野生動物のよう、鋭く生き生きとしていた。

「私を怒らせた罪は重いよ、覚悟しな！」

マグマ星人が防御を捨て、サーベルを水平に構えたその時だった！なんとイオがマグマ星人と特殊機動歩兵部隊の間に割って入り、銃弾からマグマ星人を守る盾となったのだ。

「何！？」

予想外のウルトラマンの行動に驚くコンノ。その驚きは作戦室で静観していたクルー・ガイズの隊員達も皆、同様のものではあった。

「彼は、いや、あの男はウルトラマンではないのか」

いぶかしげな表情でモニターを見つめるコンドウ司令。その周りの隊員達もやいやいと物議を醸しだし、静かだった室内がざわめき出した。

「何のマネだいアンタ」

マグマ星人が腹立たしい口調でイオに問う。

「ミエコさん、ここは退いて下さい。お願いします」

「馬鹿かいアンタは、私が退く理由がどこにあるってのさ!」

「理由は、理由があります」

イオの言葉にムツとするマグマ星人。

「理由なんてない! ウザインだよ!」

怒声を発し、マグマ星人のサーベルがイオの脇腹を貫く!

「ぐおっ!」

苦悶の表情を浮かべるイオ。

「これだけいいようにやられておいて、この私が退けると思っているかい! アンタから先に殺したって構わないんだよ、さっさとそこをどきな!」

「何故、なぜ殺さない……………さっきだって殺そうと思えば僕を殺せたはずだ」

「チッ」

思わず舌打ちをするマグマ星人。

「ミエコさん言ってましたね。表面だけにとらわれるなんて……………だから僕はミエコさんの本心が知りたい。お願いです。もう一度同じ宇宙人として話し合いの場を持って下さい……………それが、それが理由です」

サーベルを引き抜き、多少落ち着いた表情になるマグマ星人。

「とんだ頑固者だ。アンタ、女から嫌われるタイプだね。……
・・赤井！ 黒田！ 帰るよ！」

イオに背を向け何処へと立ち去るマグマ星人、大男達もマグマ星人ミエコの後に続く。

「撃ち方止めい！」

ゲンさんの号令で射撃を止める特殊機動歩兵部隊。噴煙の先にはマグマ星人はもちろん、イオの姿も消えていた。

「司令、どうしますか？」

ガイズ作戦指令室では事態の進行を見守っていた隊員達が一斉に動き始めた。

「ムラカミ君。君はどう思っかね」

「何でしょうか？」

「マグマ星人をかばった彼だよ」

「姿形は間違いなくウルトラマンです。ただしあの凶悪な宇宙人、マグマ星人をかばうとなると例えウルトラマンといえど、我々の敵という事になると思いますが」

「ふむ、やはりそういう事になるかね」

「決断は早い方がいいと思います。事態が深刻になる前に手を打つべきです」

頭をかかえ考えこむコンドウ司令。

「そうか、ならば仕方ない。マグマ星人及びウルトラマンを『ガイズ指定特別指名手配犯』として認定、各省庁に通達！」

「了解！」

室内の隊員達が口々に返答する。慌ただしくなる隊員一同。

「ムラカミ隊長、罪状は？」

オペレーターの女性隊員がムラカミを呼びとめる。

「相手は宇宙人なんだぞ、罪状は後からついてくる」

「失礼しました」

「形式にこだわるな、今のところは器物破損だ」

「了解！」

パソコンに向かってなにやら打ち込む女性隊員。

「それから諜報部を召集しろ、俺が直接指揮を執る」

「分かりました」

ムラカミ隊長と女性隊員のやりとりを横目で眺めていたコンドウ司令が小声でつぶやく。

「罪状か……………」

シンジがいなくなった現場ではコンノ達による残務整理が行われていた。

「ゲンさん。あのマグマ星人、最後に何か仕掛けようとしてなかったですか？」

「ああ、良くはわからねえが何かしでかす気配はあったな」

「やっぱりだ。と、言うことはですよ。ひょっとしてアイツ、俺等を助ける為に盾になったんじゃないですかね」

「もしそうだったらよ、アイツは俺達の命の恩人って訳だ」

イオを擁護する理想派のコンノとゲンさん。それに対して、現実派のミツウラが口を挟む。

「じゃあ何で優勢になった時に攻撃しなかったんですか？ウルトラマンなんだから光線でも出せばいいじゃないですか」

鋭いツツコミに、途端に考えこむ理想派の二人。

「んゝ、そこなんだよなあゝ。なんか状況が状況だけに只の仲間割れにも見えたりしない」

「まあ、あれだ。俺達がいくらあだこつだ言っただけでよ、上が判断する事だ。さっさと仕事終わらせて帰るべ」

「はあゝい。あ、ゲンさん、雨降って来ましたよ」

ゲンさんに対しては決して憎まれ口を叩かないミツウラ。

「相合い傘でもして帰るか？な」

「きゃゝ嬉しいゝ」

そんなミツウラのかまもとぶりに呆れ返るコンノだった。

「フウッ」

マグマ星人に深手を負わされたシンジは、降りしきる雨のなか、街を歩いていた。

（どこか、どこか休める場所を探さなくては）

脇腹を押さえ、もうろうとした頭で雨をしのげる場所を探すシンジ。傘を広げ、ずぶぬれのシンジを横目に通り過ぎていく人々。そんな人々をシンジは少し恨めしく思っていた。

（他人の事はおかまいなしか。助けてもらう気はないが、どうにも心が荒んでしまう。マグマ星人の言うこともあながち間違っていないのかもしれないな）

そんな目つきの悪くなったシンジの前に小学校低学年位の女の子が飛び出してきた。

「お兄ちゃん、これ」

その女の子は小さな自分の傘をシンジに差し出し、自らは雨に打たれている。

「僕に、これを」

シンジの心に暖かいものがこみあげる。

「ありがとう、でもいいんだ。僕は大丈夫なんだよ」

女の子の頭をやさしく撫でて傘を差し戻すシンジ。

「怪我してる、お兄ちゃんケガしてる」

なおも傘を差し出そうとする女の子。

「こんな怪我どうって事ないよ。平気、へい……………き……………」

女の子の前から立ち去ろうとしたシンジだが、大量の失血からとうとう倒れてしまった。その光景を見ていた中年主婦が大変とばかりにかけよってきて、シンジに声をかける。

「大丈夫かいアンタ、しっかりしなよ」

女の子は雨に打たれ、ずぶぬれになりながらも呆然とシンジの事を眺めていた。

意識を失ったシンジは悪夢にうなされていた。

「許さない、お兄ちゃんをケガさせた人、許さない」

どこまでも広がる宇宙空間にシンジと先程の女の子が二人きりで漂っている。

「やめろ！ やめてくれ！ 違うんだ！」

女の子の背後に巨大な核弾頭が出現した。

「許さない…………許さない……………」

女の子はうわ言のように同じ言葉を繰り返す。そして大きな大きな発射ボタンが女の子の前に現れた。

「押すな！ 押すんじゃない！」

両手を広げシンジが守ろうとしているもの、それは青い惑星「地球」だった。

「許さない」

躊躇なくボタンを押す女の子。轟音をあげて発射される核ミサイル。

「何故だ！　なぜだあー！」

核爆発の渦に巻き込まれ消滅していくシンジ。そして、つい今しがたまで無表情だった女の子が無邪気に笑っていた。

（…………ハッ！）

寝汗をびっしょりとかき、うなされていたシンジが目を覚ました。周りを見渡してみると医師に看護師、自らの腕には点滴の針が刺されている。

（そうか、女の子に会った後の記憶がない…………どこかで倒れたのか）

「先生、患者さんが目を覚ましました」

「おお、気がついたかね」

にこやかに笑いかける医師と看護師。

（この人達は僕の正体を知らない、いや、この人達だけじゃない。あの女の子だって、僕をここに連れてきた人だって皆、僕が困っていたから善意で助けてくれたんだ。なのに……………なのはどうしてあんな夢を、僕は恥ずかしい。あんな女の子まで疑って、どう

かしてる)

「どうした？ うん？」

考えこむシンジに同じ目線になって言葉をかける医師。

「いえ、助けてもらい、ありがとうございます」

シンジは深々と頭を下げて一礼する。

「いやいや、どうやら大丈夫みたいだね」

医師はシンジの意識がハッキリしているのを確認して姿勢を元に戻した。

「ところでその傷は、どうしたんだね？」

「これは……………」

シンジは事実を言い出せず沈黙するしかなかった。

「明らかに刺し傷だからね、こちらは何も聞かない訳にはいかな
いんだが」

「……………」

医師から目をそらし、沈黙を通すシンジ。

「うーん。じゃあ名前から教えてもらおうか」

医師はそう言いながら看護師に何やら目配せした。それを受けた看護師は、少し緊張した面持ちで病室から出ていく。

「どうですか、彼の様子は？」

病室の外に出た看護師を待ち構えていたのは、地球防衛隊「ガイズ」のムラカミ隊長と諜報活動に従事する隊員、数人の姿だった。ムラカミ隊長以外の人間は黒のスーツを着用している。

「いえ、まだ何も。とりあえず目を覚ましただけです」

どついう訳か看護師はおどおどした様子でうつむいている。

「隊長、やはり民間の人間には荷が重すぎます。今すぐ確保した方が良くと思いますよ」

黒のスーツを着用した諜報部の隊員がムラカミに意見する。

「待てタクマ。リスクは極力回避すべきだ。事を荒だてるのは後からでも遅くはない」

タクマと呼ばれた隊員を諫めるムラカミ。

「分かりました。ではこれを」

タクマが看護師に中味の入った注射器を差し出す。

「では、よろしく願いますよ。お姉さん」

手元がおぼつかない看護師に向かってムラカミが薄笑いを浮かべる。差し出された注射器を受けとり、震えながら病室に戻ってゆく看護師。

「・・・・・・・・ありや駄目ですね」

「フン・・・・・・・・シナリオ通りだ」

なんとも意地の悪い顔をするムラカミとタクマの両名であった。

3 - 2 「陰謀」

大小様々な船舶が停泊する市内のマリーナで、なにやら良からぬ企みを企てているマグマ星人の一行。

「赤井、黒田。分かってるね。ヘマすんじゃないよ」

赤井と黒田のまるで双子の様にそっくりな両名はゴーグルに海水パンツといういでたちで、今にも泳ぎだしそうな勢いである。

「それじゃあ行つといで、任せたよ！」

赤井と黒田の背中をポンと勢いよく押し出すミエコ。大男二人はその合図とともに海水に飛込んだ。沖に向かってまっすぐに泳ぐ二人、ミエコはその様子を見つめ不敵に笑っている。

「さあ今度はどう出るかしら？ シンジくん……」

沖合まで泳いだ赤井と黒田は一旦、お互いを確認する為に海上で顔を見合わせ、それから胸を大きくふくらませて今度は水中に潜ります。そしてしばらくすると海面にブクブクと泡が立ち始め、その後海中から不自然な渦が発生した。その渦は次第に大きくなり、マリーナ中の船舶全てを巻き込む程の竜巻へと姿を変えてゆく。

「君、やましい事がないなら、話してくれてもいいんじゃないかな？」

シンジが担ぎ込まれた病室の中では医師との押し問答が続いていた。

「・・・・・・・・」

「んゝ君が話してくれないと警察にお願いするしかないけど、それでも構わないかな？」

「・・・・・・・・」

「フウ」

医師は小さくため息をつく。そこに暗い顔をした看護師が戻って来た。それを確認した医師は、質問を切り上げてシンジに背を向ける。

「じゃあ点滴を抜いて、痛み止めの注射を射っておくよ」

「はい」

小さな声でわずかに頷くシンジ。

「失礼します」

看護師が点滴を抜き、注射器を構える。

なにやら張りつめる空気。横目でシンジの様子を伺う医師。微妙な空気の流れに違和感を感じたシンジは看護師の顔を見上げた。

「・・・・・・・・どうかしましたか？」

よく見ると看護師の血管を押さえる指が小刻に震えている。

「い、いえ、別に………」

シンジは危険を察知して、看護師の注射器を持つ手をぐいと掴んだ。

「中身はなんですか」

「嫌っ！ いやぁー！」

パキン。

注射器を落とし、必死にシンジから逃れようとする看護師。

「何をするんだ君！ 手を離したまえ！」

ろっばいする医師。それをキツと睨むシンジ。その様子をムラカミ隊長と諜報部の連中が盗聴器を通して聞いていた。

「あちゃー、ダメダメでしたね」

諜報部のリーダー格であるタクマが肩をすくませる。

「ふふ、行くか」

ニヤリと笑い病室のドアを足で蹴り開けるムラカミ。

「全員動くな！」

ムラカミ、タクマ、そして他二名の諜報部の人間。計四人の輩が一斉に銃を構える。

「おとなしくしてもらおうか」

突然銃口を向けられたシンジの顔が曇る。

（くそっ！　うかうか休んでもいられないのか）

「初めまして……」

ムラカミは医師が走り書きしたメモを拾い、ゆるりと目を通す。

「アリノシンジくん」

挑戦的な目をしてムラカミを見上げるシンジに対して、ムラカミは挑発的な笑顔で返した。

「我々はガイズ、外敵から地球の平和を守る為に組織された防衛隊だ」

諜報部の銃口は病室内の三人に向けられている。

「その防衛隊が僕に何の用だ」

「それは君が一番よく知っているはずだが……」

「・・・・・・・・」

シンジは黙ったままムラカミを見据えている。

「フン、お得意のだんまりか。それなら率直に聞こうか、君はあのマグマ星人の仲間か？」

（そうか、あの制服。全て目撃されていたという訳か）

「違う！」

シンジは激しく否定する。

「ならば何故かばうようなマネをする！ 君ならあの宇宙人がどれだけ危険な存在か知っているはずだ！」

「危険なのはお前達も同じだ！」

シンジの言葉に一瞬驚くムラカミ。

「ほう、聞き捨てならないねえ。何が同じなのかね、何が」

「・・・・・・・・」

またしてもシンジは押し黙る。地球人に対して自分がいかに接すべきなのか決めかねている為、これ以上は口に出せないようだ。

「人の質問には答えず反論だけはする。これじゃ話にならない、とにかく我々に同行してもらおうか」

アゴで合図をして銃の引き金に指をかけるムラカミ。その動きに反応して立ち上がるうとするシンジ。

「動くな！」

ムラカミが怒声を発する。動けなくなるシンジ。

「安心したまえ、これは麻酔銃だ。ただし、君にも効くように調整はしてあるがね」

「僕を捕えてどうするつもりだ！」

シンジは警告を無視してベッドから降り、立ち上がった。

「おっとそこまでだ。それ以上動くと君はともかくその二人が死ぬぞ」

ムラカミの言葉に驚愕する医師と看護師。

「どういう意味かね君！」

医師がムラカミにくっついてかかる。

「なあに、彼を動けなくする為に人間には致死量の麻酔薬を調合してあるだけの話ですよ」

看護師の顔が恐怖でひきつる。

「そして彼がおかしなマネをしたら我々は迷わず引き金を引く。狭い部屋ですからねえ。狙いがそれであなた方に命中してしまうか

もしません。まあ実質あなた方の命を握っているのは彼という訳です。不平があるなら彼に直訴すればいい」

非人道的な台詞をサラリと言つてのけるムラカミ。そしてシンジに腕を掴まれたままの看護師が泣き叫ぶ。

「助けて下さい！ 助けて下さい！ お願いしますう……ひっく」

看護師の顔を見て考えこむシンジ。

「君、話が違つぞ！ 僕らの命は保証してくれる約束だろ！」

医師がムラカミに掴みかかる。

「動くなと言っているんだ、このカスが！」

ムラカミは医師の顔面を思いきり殴りつけた。床に這いつくばる医師。

「やめろおー！」

シンジが吠える。

「フン、どうやら丸つきり我々の敵という訳ではなさそうだ」

ムラカミがシンジに対して不適な笑みを浮かべた。

「司令、神奈川方面で発生した竜巻がガイズ本部方面に向かって進行中です」

ガイズ・ジャパン総本部の作戦指令室にて女性オペレーターが慌てた様子でコンドウ司令に報告する。

「竜巻？ それは我々の仕事の領分ではないだろ。しっかりしたまえカヨウくん」

「いえ、それが気象庁からの要請で調査した結果、竜巻の中心部に生体反応が認められました」

「なに？」

事の重大性に気づくコンドウ司令。

「形状と特性から恐らくレッドギラス及びブラックギラスの双子怪獣ではないかと推測されますが」

「ふむ。成程、意志をもった竜巻がガイズ本部に向かって進行中……と、まあこつという訳だね」

「ハイ、おっしゃる通りです」

緊迫した状況報告である筈なのにカヨウ隊員はなぜだか屈託のない笑顔で返事をする。

「よく落ち着いていられますね君は？ これは由々しき事態ですよ。いわゆるバイオハザードではないですか」

なんにも考えていない様子のカヨウ隊員から報告を受け、よけいに焦りだすコンドウ司令。

「ハイ、いかがいたしましたしょう？」

先程の慌てた様子は何処へ行つたのか、コンドウ司令とは対照的に落ち着いて指示を待つカヨウ隊員。

「君はオタンコナスかね、早くムラカミ君を呼びたまえ」

コンドウ司令は無能とも思える部下の発言に苛立ち、おもわず持っていたステッキでカヨウ隊員の頭をこづいてしまう。

「もおお、いたいゝ。だつて隊長とは連絡が取れないんですもん」

頭を抱え、恨めしそうな目で司令を見上げるカヨウ隊員。その様子にハッと我に返り、慌てふためくコンドウ司令。

「おおお、悪かったすまんすまん。そ、それならコンノ君をリーダーに据えて出撃、そう出撃です」

「はあい、分かりましたあ」

恨めしそうな目をしたまま持ち場へ戻るカヨウ隊員。コンドウ司令は何事もなかったかのような顔をして目線を合わせず宙を見上げている。

（フウ、危ない危ない、女性の取り扱いには細心の注意が必要でしたね）

大事に至らずホッと胸を撫でおろす司令であった。

再び修羅場と化した病室内。

「タクマ、やれ！」

シュッ！

サイレンサーの付いた銃から放たれた麻醉弾がシンジの肩に命中する。

「……………」

（くっ！ これは只の麻醉じゃない。筋弛緩薬のような物が混入されている）

シュシュシュッ！

倒れないシンジを見てさらに麻醉弾を撃ち込む諜報部の面々。

（これ以上喰らうとまずい！）

シンジは右腕を発光させて全ての麻醉弾を打ち払った。途端に不快感をあらわにするムラカミ。

「まだ分らないのかね！」

シュツ！

ムラカミの放った凶弾が医師の喉元に突き刺さる。

「うぐっ……かぁー」

声にならない声をあげ、倒れる医師。目を見開き驚くシンジ。

「いやぁー！ やめて！ お願い、殺さないで！」

シンジの手をふりほどき狂った様にわめく看護師。

「黙りなさい、見苦しいですよ」

シュツ！

タクマが狂気の笑みを浮かべ、麻酔弾を看護師に撃ち込む。もの言わず倒れる看護師。カッと見開いた目から涙を垂れ流し、全身小刻に痙攣を起こしている。

「な、何て事を……………」

握り拳を作り怒りに震えるシンジ。

「あゝあ、可哀想に。だから動くなと言ったんだ！ お前が殺したんだ…………分かるか、お前のせいで二人も死んだ」

ムラカミは医師の脈を取り、死亡を確認する。

「君は我々にとって、とても危険な存在なのだよ。このまま君を

野放しにはできない。素直に同行してはもらえないだろうか」

シンジは今にもムラカミに飛びかかると臨戦体制をとっている。

「それとも、我々も殺して逃亡するかね？」

ムラカミを睨みつけていた目をそらすシンジ。

「今だ！」

シュシュシュッ！

再び撃ち出される麻醉弾。シンジは発光させた両の腕で全てを弾く。

（簡単に同族の命を奪う、この人達は信用できない。かといって手をあげる訳にも……どうする？）

悩むシンジ。そして答えが出る。

ガシャーン！

窓を割り、病室のある五階から外へ飛び出すシンジ。当然、追うことが叶わない諜報部はじだんだを踏んだ。

「あーあ残念、逃げられちゃいましたね」

ギリギリと歯ぎしりを繰り返すムラカミにタクマが声をかける。しかし、ムラカミはタクマを無視してしつこく歯ぎしりを繰り返している。

「隊長。ムラカミ隊長？」

心配になったのか、タクマが何度も呼びかける。

「ふふふ……」

ようやく歯ぎしりをやめたムラカミが口を開く。

「ふふ、ふははは」

「ど、どうしたんですか？ 隊長」

何の脈絡も無く、いきなり気がふれたように笑い出したムラカミに、タクマは顔をひきつらせて驚く。

「まさかこんなに上手く事が運ぶとはね」

事が上手く運んだというムラカミの言動の裏を理解し、途端に悪い顔になるタクマ。

「あ、ああ成程、これも作戦のうちという事でしたか。いやあ隊長も悪い男ですねえ」

「ふふ、これで奴は殺人罪だ。凶悪な宇宙人の出来上がりという訳だ。ふふ、ふはははは！」

「うふふふつ」

雨風が入り込む病室の中でいつまでも高らかに笑い続ける二人で

あつた。

「ガイズ・ウイング1号機コンノ、スタンバイOK!」

「同じく2号機ツチャ、スタンバイオッケー!」

「3号機ムロタ、OKです」

生物災害と認知された竜巻を食い止める為、ガイズ本部から三機のガイズウイングが出撃しようとしていた。

「コンノ機、ツチャ機、ムロタ機ともにコンディショニンググリーンです。発進お願いします」

グゴゴゴゴオーッ!

爆音と共に発進した三機のガイズウイング。

「コンノさん。隊長もいないのに僕らだけで大丈夫っすかねえ」

3号機のムロタが不安を口にする。

「隊長はいなくても俺がいるだろ、心配すんなって」

「えゝっ、どっからくるんすかゝ、その自信はゝ」

「ムロタ、お前なあ。……とにかく今回は俺がリーダーだ、俺の指示に従え。分かったな!」

「へえ〜い」

雷雨の中、ひとけの無い道をどこへとなく走り続けるシンジ。そして、ある場所で奇妙な感覚に襲われ、ふと足を止めた。

「どこに行くつもりかしら、シンジくん」

建物の影から、ふらりとシンジの前に現れた一人の女性。なにやら含みを持たせた透き通った声。その声の主はマグマ星人の仮の姿「ミエコ」だった。突然のミエコの出現にシンジは辺りを静かに見渡す。どうやらミエコの他には人影は見当たらない。

「少しは注意深くなったわね。でもおあいにくさま、あの二人には仕事を頼んであるわ」

ミエコの言葉を信用してゆつくりと息を整えるシンジ。そして単刀直入にミエコに対しての疑問を投げかける。

「ミエコさん。聞かせて下さい、あなたがこの惑星にとどまる本当の理由を」

思いがけない質問にうつたえるミエコ。

「わ、理由を話したら仲間になってもなってくれるのかしら？」

「それはできません」

シンジのにもない即答にミエコはため息をつき、呆れ返ってしまふ。

「ったく、話しにならないね。まあいいわ。アンタにその気がなくても世間じゃ私らは共犯者って事になってるみたいだけどね」

ミエコの共犯者発言に不思議な顔をするシンジ。その顔にミエコは意地の悪い笑みを返し、ミエコとシンジの写真が連なって刷られた指名手配書をシンジの目の前につきつける。

「じ……………これは！」

雷鳴が鳴り響き、時折まぶしく軒下の二人を照らす中、シンジはわが目を疑う。

バリバリバリ！！

豪雨の中、ミエコが解き放った大男達の作り出す竜巻が猛威を奮っていた。電柱を引き抜き、家屋の破片を舞いあげながら竜巻は進軍する。

「グオオーーン！！」

凄まじい轟音に混じって聞こえてくるのは、赤井と黒田の化身であるレッドギラスとブラックギラスの雄叫びだった。

4 - 1 「表裏」

ピカッ・・・・・・・・・・ゴロゴロゴロ・・・・・・・・・・。

どこかに雷が落ちた。シンジとミエコは豪雨の中で背の高い建物の軒を借り、対峙していた。

「これは手配書。なぜこんな物が・・・・・・・・」

放心状態のシンジ。「持ち出し厳禁」と印が押された手配書には、まぎれもなくシンジの写真が刷られている。

「フッフ。驚いたかい？ 信用なんてものは一瞬で失われるもんなんだよ。特にこの惑星のバカ共から得た信用なんてね」

「僕の責任だ、僕の軽はずみな行動のせいで一族が築いてきた信用を失なってしまった・・・・・・・・」

人を陥れるようなミエコの言動も手伝って今にも泣き出しそうなシンジ。その発言に、そして簡単に落ち込むシンジに不甲斐なさを感じて、なにやらむっとした様子のミエコ。

「アンタは別に悪くないね！ アンタにはアンタの正義があったんだろう、アンタの一族に義理立てする事なんかあるもんか」

正義があったというミエコの言葉に自分のとった行動を思い起こし、ハッとなるシンジ。

「そうだ、確かにあの時はああするしかなかった。ミエコさんと

地球人の仲裁に入るにはあれしかなかったんだ」

「フン、おめでたい男だね。表と裏が間違ってたんじゃないのかい？ 地球人に背を向ければ風穴を開けられる事もなかったろうにさ」

「いや、あの時僕は何よりミエコさんが傷つく姿に心が動いた。表と裏は間違ってます」

そう真顔で答えるシンジにあわてて目を背けるミエコ。

「バツ、バカじゃないの。そんな事どうだっていいんだよ！ とにかくアンタと私は仲間って事になってんだ。私らだけで悪事を働いても、アンタも同罪って事になるんだよ！」

口を真一文字に結んでしばらく考えこんだシンジは、ミエコを見つめて自信たっぷりに口を開く。

「構いません。阻止します」

「まったく、いちいちカンにさわる男だねえ、じゃあ試してみようじゃないか」

その言葉に眉をひそめるシンジ。そして渋々構える、ファイティング・ポーズ。

「何やってんの、アンタ？ 別に一戦交えようって言うてんじゃないんだけど」

戸惑った表情で構えを解くシンジ。苦笑するミエコ。

「ククッ。面白い男だねえ、今の面白かったからヒントを出すよ」

気恥ずかしさのあまり、うつむいてしまうシンジ。ミエコは別に気にも留めていない様子だ。

「私は、かなり執念深い女だよ。欲しい物は絶対手に入れるし、やられた事は倍にして返さないと気が済まない」

「この間の地球人に報復する気ですか？」

「さあ？ これ以上は言えないねえ。阻止するんでしょう、早くしないと間に合わなくなるわよ。」

人を食った笑いを浮かべるミエコ。考えこむシンジはもう一度手配書に目を通す。

「G・U・Y・S・・・・・・ガイズ」

手配書に書かれていた管轄先の名称を読みあげるシンジ。ミエコの瞳が一瞬妖しく光った。

（そう言えばさっきの連中、あいつらもガイズと名乗っていたな）

シンジの脳裏にムラカミの悪魔の笑顔がよぎる。

「ガイズ・・・・・・あんな奴ら、いなくなってしまう方がいい」

「へっ・・・・・・？」

シンジの言動にミエコは目を丸くして驚いた。

ゴゴウ！　ゴゴウ！

暴風が吹き荒れ、次々と家屋を破壊してゆく。暴風半径は狭いものの、その破壊力は凄まじく、ギラス兄弟がもたらす被害は甚大なものになっていた。そしてようやく三機の戦闘機が姿を現した。

「ツチャ、ムロタ、どうだ、見えるか？」

コンノがガイズウイングのコクピットから指示を出す。

「はい、レーダーでも確認できました」

レッドギラスとブラックギラスの巻き起こす竜巻を食い止めるべく、三機のガイズウイングが迎え撃つ。この竜巻は「ギラス・スピーン」というギラス兄弟の攻守に優れた必殺技がその正体である。兄弟が抱き合い、高速で回転する。本来は敵の攻撃から身を守りつつ、頭部の角から放たれる怪光線を増幅する役目を担っている。なお、竜巻を発生させる際は竜巻の規模に合わせて兄弟の体が離れていくので幾分守りが弱くなるようだ。

「ツチャ、レーダーに頼るなよ。よく見てみる、目が光ってやる」

コンノの助言に対してツチャ機が接近を試みる。

ゴロゴロゴロ……ドカーン！

接近を試みたツチャ機を雷が襲う。機体から煙があがり、尾翼に風穴を開けられてフラつくツチャ機。

「うつわ、危ねえ……。コンノリーダー、コンノリーダー？ やばくないっすか？」

ムロタがぼやき、コンノも顔面蒼白になり驚いている。

「ツチャ！ ツチャ！ 大丈夫か？」

気を取り直してツチャに呼びかけるコンノ。

「はい、危ない所でした。でも確認できました、確かに目が光ってます。かなり狙いにくいですがあそこに攻撃を集中しましょう」

機体を持ち直したツチャが無事なのを確認してコンノは胸をなでおろした。

「ようし、そういう事だ。ムロタ、確認できてるな！」

「ういっす」

「フォーメーション！」

コンノの掛け声と共に三方向へ散るガイズウィング。

「スペシウム弾頭弾、一斉発射！」

ドカーン！！！！

ガラス兄弟の位置を正確に捕えて巻き起こる爆発。しかし黒煙はすぐにかき消され、お返しにガラス兄弟による放電が隊員達を襲う。

ゴロゴロゴロ……ドカーン！

三機のガイズウイングがものの見事に被爆した。その内すでに尾翼をやられていたツチャ機は右翼も大破させて、墜落していく。

「おい！ ツチャ！ 早く脱出しろ！ おい！」

コンノが大声で呼びかける。

「すみません………計器がやられて脱出装置が動きません」

「何だって！」

愕然とするコンノとムロタ。

「おい！ あきらめんなって、何か方法があんだろ！」

ムロタが悲痛な声色呼びかける。

「ムロタごめん。結局俺………役立たずだったよ」

「ツチャ、ツチャー！」

黒煙をあげて、たよりなげに墜落していくツチャ機。

ドッカーン！

程なく地上に激突し、四散するガイズウイング。爆散を確認したコンノが苦渋に満ちた顔で口を開く。

「ムロタ・・・・、俺達は戦闘機乗りだ。ツチヤのように死ぬ覚悟はできている。だが、お前は帰還しろ！ 帰って他の手を考えろ」

真剣な口調で命令するコンノ。

「できません。このまま帰るなんて、いくらリーダーの命令でも無理っす」

「バカ野郎！ 俺らが勝てる相手じゃねえんだよ！ 分かんねえのか！ それにお前の機体は長くはもたん、すぐにエンジンがいかれるはずだ」

ムロタ機の噴射口が剥きだしになっていてバチバチと火花を散らしている。

「大丈夫っす。奴らに一泡ふかせてきます」

仲間を失った悔しさがムロタをつき動かす。

「ムロタ、やめろ！ 死に行くのは俺一人でもいい！」

「やめて下さい！ ツチヤとは同期の桜・・・・一緒に散るのは俺の役目です」

隊列を組んでいたムロタ機が離脱、ギラス兄弟に向かって突っ込

んで行く。その時……。

「むうろたあー！！」

コンノとムロタのコクピットに響き渡る怒声。

「隊長！」

声の主は隊員の危機に駆けつけたムラカミ隊長だった。

「このバカ者どもが！ 俺の承諾なしに殉職する事は許さん！」

安堵の笑みを浮かべるコンノとムロタ。

「隊長、すみません。俺がツチヤを死なせました」

コンノが開口一番、自責の言葉を伝える。

「コンノ、自分を責めるのは後だ。今は目の前の敵の事だけを考えろ。それにツチヤは無事だ、俺が救出した」

「ええっ！」

同時に驚くコンノとムロタ。雷雨のさなか、車輛脇で上空を見上げて無線機を片手に立つムラカミ。そして、もう片方の腕には気絶したツチヤをしっかりと抱えている。

「さすが隊長！ 本っ当、頼りになりますねえ」

ムロタが嬉々として手放して喜ぶ。

「良かった。ありがとうございます！」

コンノは心から礼をする。

「リーダー、コンノリーダー？ やっぱ俺やめときますわ、カミカゼ特攻隊。代わりに行ってきて下さい」

ムロタ機が旋回して戻ってきた。

「バカ野郎、お前たいがいにしるよ」

涙目のコンノが笑う。

「ようし、その調子だ。お前らよく聞け。今から奴らを殲滅するぞ、分かったな！」

「了解！」

ムラカミの自信に満ちた態度に活気づくクルー・ガイズ。

「コンノ、お前をうちのエース・パイロットと見込んで策を授ける。いいな」

「は、はい！」

エース・パイロットという響きにプレッシャーを感じながらも返答するコンノ。

「話は単純だ、奴らの作り出す風に乗れ。そしてつき抜けろ！」

ムラカミの力強い言葉を風に寄せ、クルー・ガイズ反撃の狼煙があがった。

「そうだ、あんな奴らいなくなってしまえばいいんだ」

ムラカミ率いるガイズに対して、怒りの衝動を押さえられないシンジが暴言を吐く。

「そうだ、そうだ。その通り！　なんだアンタ、やる気になったの？」

シンジの肩に手を回し、もろ手をあげて喜ぶミエコ。

「あつ、いや、つい……………」

自身の発言に驚き、平静を装おうとするシンジ。

「いいんだよ。自分の気持ちにもっと素直になんなきゃ」

自分達に少しばかり歩み寄ったシンジに、ミエコはここぞとばかり説得を試みる。

「出来ない。なんと言われようと使命に背く事は出来ません」

「んもっ！」

ミエコの顔から笑顔が消え、あまつさえシンジの肩をド突く。

「アンタ二言めにはそれか。使命だの一族だのって、昔かたぎかたくうゝ」

頑なに使命を守ろうとするシンジにミエコは悪態をつく。

「確かに僕は地球人に対して憎しみを抱いています。でも、それ以上に愛してもいる。この思いは変わらない、いや、変える事はできない」

矛盾する思いと決別するようにキツパリと言い切るシンジ。

「フン！ 洗脳されてんだろ、そりゃ。あゝ喜んだ分、余計に腹が立った」

肩透かしを喰らい、怒り心頭のミエコ。

「洗脳・・・・・・・・ですか」

「何してんだい。さっさと行きな、だいたいの見当はついてんだろ」

犬でも追い払うかのような仕草をするミエコ。

「ミエコさん。ひとつ聞いていいですか、あの占いは僕を騙す為だけの嘘だったんですか？」

不安と期待がシンジの胸を交錯する。

「みくびってもらっちゃ困るね、占星術はこの惑星の奴らだけの

物じゃないんだ。あの鑑定は全部本当の事さ。私は詐欺師じゃないんだ」

詐欺師じゃない、その言葉に納得した様子のシンジ。

「そうですか。それなら僕はもうすでに道を選択してしまったかもしれません」

「えっ？」

気になる一言を残し雷雨の中へ駆け出すシンジ。ミエコは釈然としない顔でシンジを送り出す。

「作戦開始！」

「了解！」

ムラカミ隊長の号令と共に、竜巻から距離を取って並走を続けていたコンノ機が隊列を離れ、低空飛行に移行した。

「いいかコンノ、気流の流れは常に下から上だ。そして大きな円を描いている、風の流れを掴むんだ」

ムラカミが力強く指示を出す。目を大きく見開き神経を集中するコンノ。

「気流の入り口を確認、これより突入を開始します」

高ぶった心を落ち着かせようとして、コンノは何度も何度も深呼吸を繰り返す。

「よし、メテオール解禁！」

メテオール発動の権限を持つムラカミが発動を許可する。メテオールとは一時的に機器の推進力などを爆発的に高め、通常では出来ないUFO的飛行等を実現させるシステムである。

「リアライズ」

コクピットに無機質な音声流れ、ガイズ・ウイングがより鋭角的に変形、右翼と左翼が割れて4枚の翼を持つロケット型に姿を変えた。

「右回転！」

コンノの掛け声と同時に右方向に回転を始めるガイズ・ウイング。

「南無三！」

三半規管がおかしくなりそうな程に回転速度が上昇してゆく。そして進行する竜巻に機体を合わせて突入を開始するコンノ。もはや上も下も右も左も分からない、そんな状態で頼りになるのは仲間からの指示だけである。

「行け！」

上空で祈りをこめて握り拳を作るムロタ。

「うおおおー！」

スパイラル状の気流に何とか機体を合わせて上昇していくコンノ機。本来なら荒れ狂う竜巻に突っ込んだ時点で機体はバラバラになる筈だが、そうならなかったのはメテオールというハイテクノロジーとコンノの卓越した操舵技術、及び集中力のなせる業であった。

「ムロタ、タイミングを計れ」

気流に乗ったコンノ機を確認したムラカミが指示を出す。

「コンノリーダー、今です！」

ガラス兄弟が帯空している高度まで上昇したコンノに対してムロタが合図を送る。

「逆噴射！」

上昇を続けるガイズ・ウイングに逆噴射をかけ、上昇速度を緩めるコンノ機。そこを狙って竜巻外側のガラス兄弟の放電が竜巻中心部から上昇してきたコンノ機を襲う！

ゴロゴロゴロ……ドカーン！

竜巻渦の中でまばゆい光と爆音が響き、一瞬、時が止まったように無音状態になった。そして爆煙の中から右回転を持続したまま、コンノ機が竜巻渦から無傷で生還を果たしてきた。

「ゲオオーン！」

お互いの電撃をかわされ、同志討ちになってしまった双子怪獣の雄叫びが響き渡る。そして風は乱れバランスを失い、巨体を震わせながらギラス兄弟は地上に落下していく。

「やったあ！」

ムロタが喜び、コンノがガッツ・ポーズを作る。

「喜ぶのはまだ早い、距離を取れコンノ！」

メテオールが発動限界となり元の姿へ還るガイズ・ウイング。そこへ恐るべきバランス能力で持ち直したギラス兄弟の二次放電がコンノ機を追撃する。

「アルタイド・ブレイザー！」

バリバリッ、ドカーン！

間一髪、ムロタ機のレーザー攻撃が電撃を相殺させてコンノは、なんとか難を逃れた。

「バックアップご苦労」

落ち着いた態度でそう口にしながらも、冷や汗でびっしょりのコンノ。

「いえいえ。仕事ですから」

ムロタはそれを見透かした様な口ぶりで返事をする。

「コンノよくやった、上出来だ。しかし今ので墜ちないのか」

思惑が成就したのにもかかわらず結果が伴わなかった為、途方にくれるムラカミ。

「いえ隊長、もう一押しです。今度は俺が行きます」

かたや、あわや作戦成功かという結果に気を良くする脳天気なムロタ。おそらく何度試みても結果は同じだろう、それどころか意味も無く隊員を失う事はムラカミのプライドが許さなかった。そんな思案に暮れるムラカミの視界に一人の男が飛び込んできた。

「いや、少し待てムロタ、ヒーローのおでした」

尋常ではない笑みを浮かべ、無造作にツチヤを放り出すムラカミ。そして、その脇を駆け抜ける男が一人……シンジだ！シンジがやって来た！

4 - 2 「消失」

「司令、レッドグラス及びブラックグラスの本部到着まで残り3分です！」

ガイズ本部では総員に避難勧告が発令されていた。

「むむむむ……頼みますよムラカミ君。」

両手を合わせ祈るコンドウ司令。

クルー・ガイズ制服組の華、ミツウラ、カヨウ二人の女性隊員はバックアップの体勢を整える為、忙しくパソコンのキーを叩いている。

「アイちゃん、アイちゃん。ちょっと司令の顔見てよ。」

隣で必死になってパソコンと格闘するカヨウ隊員にミツウラ隊員が耳打ちする。

「んっ。」

ミツウラに促されるままコンドウ司令の横顔を伺うカヨウ。司令は冷や汗をかき、何やらぶつぶつ口を動かしている。

「これってヤバイんじゃないの？」

不安を煽る発言をするミツウラ。

「大丈夫だよサキ、心配しすぎだって。」

ミツウラの背中をちから一杯叩く脳天気なカヨウ。

「痛たたつ。なんだその根拠の無い自信は？」

前のめりになるミツウラ。

「だいじょぶ、今ミサイル百発撃てるように仕込んでるから、ね。」

にこやかにキーを打ち続けるカヨウ。

「えっ、百発ってアンタ。」

（ただ者じゃない、こいつはただ者じゃない！）

などと感心するミツウラだった。

廃墟と化した街。ガラス兄弟が残した爪あとをレールに見立ててシンジは駆ける。

猛烈な勢いで駆ける、駆ける。徐々に人の目では認識出来なくなる程に速度をあげながら。

（渦の回転は右、ならば変身と同時に左回転で突っ込む！）

「イーーーーオーーーーー!!」

強い光のオーラを発してイオへと変身するシンジ。空中で竜巻とは逆方向へ回転をかけて、両腕でバランスを取る。

「ウルトラ・スピン!」

全身で雨を弾き、猛烈な回転速度で無理矢理、竜巻に突入していくイオ。

攻めぎあう風と風、激しくぶつかりあう電子が電気を発生させ、イオの全身を包み込む。

「だあー!」

回転速度を更にあげるイオ。ガラス兄弟の体が大きく揺れ、内輪の風が外輪の風を凌駕した。

「グオオーン!」

風の外側へ放り出されるガラス兄弟。

ドスン!!

激しい地響きと共にレッドガラスとブラックガラスは地上へ落下した。

「おお!やりやがった!」

コンノをはじめガイズ隊員達から歓声が沸き上がる。

「なんだ彼はやっぱり味方でしたか。」

一息つく司令。手を取りあつて喜ぶ女性隊員の二人。そんな中、ムラカミだけは終始悪意に満ちた笑顔のままである。

「フン、せいぜい頑張ってもらおうか。」

ガラス兄弟の竜巻を打ち破ったイオは空中で身構え、すぐさま攻撃に移る。

（まずは赤い奴を仕留める！）

落下のショックで身悶えるレッドガラスに狙いを定め、高度一千メートルからのイオ・キック！

「うおりゃあー！」

摩擦熱をおびて真つ赤に燃えあがるイオ。

バキーン！

レッドガラスの背びれのような角が折れ、瓦礫の彼方へ散つていった。

（くっ、未熟。痛み分けか。）

インパクトの瞬間レッドガラスが体を丸めて防御した為、狙いがそれてしまい逆に足首にダメージを負ってしまったイオ。

背中を折られたレッドギラスは体を起こそうとしている。

（待て、こいつ！）

立ち上がろうとするレッドギラスの尻尾を掴み、ジャイアントスイングの体勢に入るイオ。

兄弟の危機を救わんとドタバタと突進してくるブラックギラス。

（頭は悪そうだが、やりやすい。）

イオはレッドギラスを一回転だけスイングさせた後、両手を離しブラックギラスに向かって放り投げた。

「グワオーン！」

お互いの体を強く打ちつけ、無様な姿でひっくり返るギラス兄弟。

（どうしたでく人形ども、かかってこい！）

余裕をかまし、軽くストレッチをした後でファイティングポーズをとるイオ。

「グワーツ、オッオ。」

よつんばいになり、妙な鳴き声をあげるレッドギラス。

「グワーツ、オッオ。」

それに呼応するブラックギラス。

（なんだこいつら、なんの合図だ。）

イオは二匹を交互に見比べ警戒する。

「グワッー、オッオ。」

ギラス兄弟は鳴き終わると同時に、胸を大きくふくらませて息を吸い込み始めた。

（ん、あれは？）

二匹の体を目を凝らして良く見ると体を覆っている突起物から風が噴き出している。

（まさか、再び竜巻を起こすつもりか？）

そしてレッドギラスとブラックギラス、二匹の体が地上からわずかに浮き始めた。

（させるか！）

前方宙返りで距離を詰め、ブラックギラスにかかと落としを決めにかかるイオ。

「うりゃあ！」

さして瞬発力があるとは思われなかったブラックギラスが横方向に素早く移動する。

あり得ない移動の仕方に必殺のかかと落としはすんでの所でかわされ、空振りに終わった。

（何だ今のは？）

「グアオツ、グアオツ。」

イオのかかと落としをなんなくかわしたギラス兄弟はホバー・クラフトのように地上から少しだけ体を浮かせて瓦礫の山と化した街を、縦横無尽に駆け巡る。

（うっ、この動きは！）

イオはブラックギラスの俊敏な動きに目を奪われた。その隙をついてレッドギラスが豪快なタックルを決める。

体勢の整わぬ内に吹っ飛ばされるイオ。更にブラックギラスが頭を低くして目にも止まらぬ速さで突っ込んできた。

（くそっ………よけきれない！）

ブラックギラスは頭の角をイオの脇腹に引っ掛けて自らの頭上高く放り投げた。

宙に投げ出され、必死にもがくイオ。

（しまった、なんとかしなければ。）

双子怪獣ならではの見事なコンビネーションが冴える。まるでピンボールの玉の如く二度、三度と弾かれ傷ついていくイオ。

「コンノ君、ムロタ君。何をしているんだ君達は！ウルトラマンを援護したまえ！」

惨状を見かねたコンドウ司令がコンノ達を促す。

「はっ、了解！」

ガイズ本部を含む戦闘地域を大きく旋回していたガイズ・ウイングが、機首を下げイオ救出に向かう。

「やめろ、コンノ！ムロタ！」

コンドウ司令の命を受けたコンノとムロタをムラカミが制止する。

「お言葉ですが司令、彼は犯罪者です。援護する必要はありません！むしろこの機に殲滅するのが得策でしょう。」

「何を言ってるんだねムラカミ君。現に彼は我々の為に戦っているではないか。」

司令席から立ち上がり、ムラカミに反論するコンドウ司令。

「違います、我々の為ではありません！奴らは仲間割れをしているに過ぎません。なぜならば……。」

静かに聞耳を立てるクルー・ガイズ一同。

「数時間前に私は彼に接触を試みました。事情徴集の為同行を願ったところ我々の制止を振り切り逃亡、その際に医師と看護師二

名を彼は殺害しています。」

「何!!」

ムラカミの発言に驚くクルー・ガイズ一同。コンドウ司令は落胆の色を見せ、腰を降ろす。なおも言葉を続けるムラカミ。

「彼は正義の使者などではありません! 犯罪者です。それも人命などなんとも思わない凶悪宇宙人です。」

事実をねじ曲げ策謀をつくすムラカミ。

「そうか……。」

ため息をつき、腕組みをするコンドウ司令。

「それは事実だね。」

今一度ムラカミに確認を取る司令。

「彼に危うく殺されかけた諜報部の人間に証言させましょうか。」

冷たくいい放つムラカミ。そして頭をかかえていた司令が決断する。

「分かった。我々クルー・ガイズが殺人犯を援護する訳にはいかん! コンノ君、ムロタ君。攻撃目標をウルトラマンを含む三体に変更! 本部からも援護をする。一斉攻撃だ!」

「り、りようかい……。」

苦々しい表情で操縦かんを握るコンノ。

「ムロタ、行くぞ！」

「分かりました、リーダー。」

やる気の無い口調のムロタ。

「コンノ、ムロタ。まずはウルトラマンに攻撃を集中させる！奴を正義のヒーローだと思うなよ。怪獣なんかよりずっと恐ろしい相手だ、殺らなきゃこっちが殺られる。気を引き締めてかれ！」

「了解！」

二人の隊員に喝を入れた後、無線のスイッチを切るムラカミ。

「フン。コンノ、ムロタよ。殉職を許可するぞ、華々しく散ってこい。フフフ。」

ムラカミは口元を緩ませて、恍惚の表情を浮かべる。

「グワルルル！」

何度も繰り返されるガラス兄弟のアタック！ようやくタイミングを掴んだイオはレッドガラスの首になんとかしがみつき、反撃を試みようとした。

（よし、やっと捕まえた。）

しかし安堵したのも束の間、ガイズウイングのミサイルがイオを捕える！

ドカーン！！！！

わずかに見出した活路を潰され、またもや宙に放り出されてしまったイオ。

（うつつ何をする……………。）

もつろつとする意識の中、カラータイマーが青から赤に変わる。

「ゲワオー！」

休む事なく攻撃を続けるギラス兄弟とガイズの連合軍。イオは身動きひとつせず雨に打たれる柳の如く攻撃を受け続ける。

（このまま僕は死ぬのか？使命をまっとうする事もできずに。）

イオの体を包んでいた光のオーラが輝きを失い、消えていく。

（もう、どうでもいい……………。）

イオは両腕をクロスさせる。そして光のオーラが完全に……………
・消えた。

（なにもかも消えてしまえ！）

イオの肩から指先にかけて一陣の光が走る！

「スプリット・ブレイク!!」

宙に浮いた状態で両腕を思い切り広げるイオ。

そして両腕から放たれた光の白刃がガイズ・ウイングをかすめて
双子怪獣へ向かってゆく。

バチバチッ!!

イオの放った二本の白刃はレッドギラス、ブラックギラスそれぞれの首を切断!そして切断面から原子崩壊を起こして、さらに破壊を繰り返す。

ドスン!!!

瓦礫の山に三体の巨体が横たわった。上空ではイオの必殺技をす
んでのところでかわしたムロタ機がコントロールを失い、ふらつき
始めた。

「リーダーすみません。先に脱出します。」

「なんだって?」

ムロタの発言の意味がわからず聞き返すコンノ。

「今の攻撃でえらい事になってますんで。」

ひっかいた程度の傷が徐々に亀裂に変わり内部機器が炎上しだした。

「ええっ、かわしただろ。」

「いやあ、やばいんですって実際。」

脱出ボタンを押し、機外へ飛び出すムロタ。主を失ったムロタ機は墜落し、無惨に爆発炎上した。その光景を見てひそかに笑うムラカミ。

「クククツ、命拾いしたなムロタよ。コンノ、お前だけでも死んでこい。」

カラータイマーを赤く点滅させ身動きひとつしないイオ。その様子を伺う為、コンノ機は低空飛行になる。

「何なんだ、一体……。」

頭の中が混乱して何をどうすればいいのか分からないコンノ。

（うるさいハエめ。）

イオは近くに寄ってきたコンノ機をむんずと掴む。

「うわっ、やめろ！」

ギシギシギシッ！

きしんでいくコンノ機。

「そうだ握りつぶせ！ウルトラマンを超えろ！」

興奮のあまりツチヤの存在を忘れ、おもわず大声になるムラカミ。

（やめろ！その男に罪はない！）

イオの内なる心の声が聞こえてくる。数秒の葛藤の後でイオは握った手を緩ませ、そのまま力尽きた。

コンノ機は支えを失い地上に激突する。

「うわあー！」

ガガゴン！

強い衝撃を受けたコンノだが幸い大事に至る事はなかった。

「ふう、助かった。」

心から安堵の表情を浮かべるコンノ。

「くそ、もうひと息だったか。フン、まあいい、奴の光のオーラは消えた。とりあえず第一段階はクリアだ。」

満足気なムラカミ。そして足元に転がるツチヤを蹴りつける。

「起きろツチヤ、帰るぞ。」

目覚めるツチヤ。

「あれ？隊長。隊長も死んだんですか？」

殺風景な周りの景色を見渡し、勘違いするツチヤ。

「バカ言っな。お前はちゃんと生きている、ここは地獄じゃない。」

「うーん、えっと。確か爆発する寸前に隊長の顔が浮かんで・・・。」

何かを思い出そうとするツチヤ。

「深く考えるな。とにかく助かったんだ神に感謝しろ。」

あわてて、思考をさえぎろうとするムラカミ。

「でも、隊長が助けてくれたんですね。僕にとっての神は隊長です。」

「好きにするさ。」

どうでもいいといった様子のムラカミ。

「ただあんな状況でどうやって?」

考えるのをやめないツチヤ。

「ツチヤ、ツチヤ。それは内緒だ。」

爽やかな笑顔でツチヤの気をそらせるムラカミ。ツチヤはその笑顔にほだされ、考えるのをやめた。

「おっ、いたいた。皆さん、こっちです。」

戦闘直後の瓦礫の山で何やら暗躍する黒服の集団。タクマとガイズ諜報部の連中である。

「さあさあ、皆さん。運んで下さい。目を覚まさないように、そつと運んで下さいよ。」

タクマが指示を出して瓦礫の中から誰かを運び出そうとしている。

「さて、どうなる事やら。うぶぶつ。」

気持ち悪い笑い方をするタクマ。そして運び出されたのは傷つき気を失ったシンジだった。

5 - 1 「脱出」

「それじゃ、その件は明日また。」

仕事を終えて同僚と別れ、一人夜道を帰宅するガイズ諜報部のタクマ。仕事終わりという事もあって疲れた顔をしている。

「大声出すんじゃないよ。」

突如として降りかかる災難。タクマは背後から首筋に刃物を突きつけられ、直立不動になった。

「アンタ、ムラカミの部下だね。」

「は、は、はい、そうですが。わ、私に何か？」

恐怖に声が裏返るタクマ。そして恐る恐る悪漢の顔を確認する。

「あなたは確かマグマ星人の………。脅かさないで下さいよ。」

暗闇に紛れ自前のサーベルでタクマを制するのはマグマ星人のミエコである。

「ふん、アンタに馴れ馴れしくされる覚えはないよ。いいかい、アンタの上司に伝えな。ウルトラマンを釈放しろってね！」

「いや、それは状況的に考えても無理かと。」

返答に窮するタクマ。

「アンタに言ってんじゃないよ！とにかく伝えればいいのさ。私が決着をつけたがつてるってね！」

サーベルをぐいっと喉元に押しつけるミエコ。

「は、はい。分かりました。伝えます。」

タクマはミエコの迫力にたじろぎ、両手をあげ降参する。

明けて、ガイズ本部独房。捕えられたシンジが座禅を組み、精神集中をしている。

キイツ。

独房前室に誰かが入ってきた。コンノである。

「なあ君。頼む、俺と話をしてくれ。」

コンノに背を向け全く微動だにしないシンジ。

「君が俺らの敵だと言うのなら、あの双子怪獣を葬ったのはなぜだ。仲間同士で争っただけだと上の連中は言うが俺は信じない。君は俺らを守ってくれたんじゃないのか！」

「……………」

シンジは何も語ろうとしない。

「じゃあ俺を殺さなかったのはなぜだ？罪のない人間を殺したんだろ。じゃあなぜ、君を攻撃した俺をころさないんだ！おかしいじゃないか！」

壁を叩き、熱く語るコンノだがシンジは全く耳を貸す様子がない。

「分かった。ただ、君には知っていてほしい。俺は君を信じたいいや、もう信じている。そして俺と同じく君を信じている人々が世の中には大勢いるという事だけを。」

「コンノ！」

前室にムラカミが入ってきた。

「無駄だ！そいつは何も答えない。」

鉄格子に手をかけ、コンノの横に陣どるムラカミ。

「失礼しました！」

ムラカミに一礼して席を譲るコンノ。

「どうでしたコンノさん？」

廊下に出てきたコンノを待ち構えていたのは好奇心旺盛なミツウ

ラだった。

「おうサキ。いや後を向いて完全黙秘だ。それよりあいつ、この間会った時とは別人みたいだ。」

「後ろ姿で分かるんですか。ほうほう。」

「いや姿形じゃなくて何ていうか、覇気がないと言うか、意気消沈していると言うか。」

「そりやお縄についたんだから意気消沈もするでしょ。」

「うゝんオーラがなくなつたと言えばいいのかなあ。」

「ふゝん。オーラねえ……。」

コンノを上から下まで見回して、さげすんだ笑いを浮かべるミツウラ。

「それでもコンノさんよりはあると思いますよ。」

「コラ、どういう意味だこのやろ。」

何を言っても茶化されてしまうコンノである。

「君さ、いつまでそうしてるつもりなのかな？そろそろ暴れたくなってきたんじゃないか？」

シンジを挑発するムラカミ。

「君がその気になればこんな施設、破壊する事なんて簡単だよなえ。」

シンジは座禅をやめてムラカミと相對する。

「いつまでだと。」

前に出てきたシンジに対して少し体を引くムラカミ。

「それはお前の正体を暴くまでだ!」

鉄格子から手を伸ばし、ムラカミの首根っこを絞りあげるシンジ。体が浮きあがり、苦悶の表情を浮かべるムラカミ。

「ぐう………!!」

ムラカミは銃を抜き、シンジに銃口を向ける。撃て、と言わんばかりにムラカミを見据えるシンジ。

「フフフ。」

バキューン!

ムラカミはニヤリと笑い、天井に向けて発砲した。

「大丈夫ですか!隊長!」

駆け付ける施設警備のガイズ隊員。シンジはムラカミを解放する。

「フン、正体を暴くだと？殺すの間違いじゃないのか？」

おもむろに立ち上がり攻勢に転じるムラカミ。

「俺を殺してみろ！」

両手を広げ、ノーガードの意思を示すムラカミ。

「但し俺はここの指揮官だ。その場合は俺の部下が黙ってはいないがな。」

シンジに銃口を向けるガイズ隊員。卑劣な物いいをするムラカミを睨みつけるシンジ。

「隊長、すみません。お話しが……………」

取り込み中の前室に今度はタクマがやって来た。

施設の外に出たタクマとムラカミは辺りを伺いながら声を潜め、話し出した。

「隊長、マグマ星人の女が彼を釈放しろと要求してきました。」

「何を馬鹿な。手駒を失った女に何ができると言っただ。」

怪訝な顔をするムラカミ。

「それがすごい剣幕で決着を着けさせろ。」

「ふん、あの女にもう出番はない。引っ込んでろと伝える。」

全く意に介さないムラカミ。

「そうですよね、わかってはいましたが。」

やっぱり、と頷くタクマ。

「いや待てよ。この際だ、邪魔者には消えてもらおうか。腕ずくで奪いに来いと伝えて来い。ふふふ。」

悪巧みが浮かんだムラカミは口元を緩める。

「えっ、本気ですか？」

ギリギリッ。

驚くタクマなど眼中にない様子で歯ぎしりを始めるムラカミ。

ウオーン。ウオーン。

月明かりの中、非常警報が鳴り響くガイズ本部。黒革のスーツを身にまとったミエコが単身乗り込んで来た。

「ふん、手応えのない連中だね。戦う気あんのかい？」

応戦するのはツチャ率いる施設警備隊員。ミエコと一定の距離を取り、けして近接戦闘にならないように動いている。

「隊長、独房までの誘導、完了しました。」

「案内ご苦労。ツチャ、引き上げる。」

作戦指令室で指示を出すムラカミ。相変わらず意地の悪い笑みを浮かべている。

「一体どこにいるんだよ、アイツは。」

右のサーベルで所かまわず切り裂くミエコ。

「ミエコさん！」

鉄格子ごしに目と目が会うミエコとシンジ。ミエコは鉄格子をサーベルで一閃する。

「何やってんだよアンタは、早く逃げるよ。」

「ミエコさん。どうしてここへ？」

「アンタにこんな所で引きこまれてちゃこっちが困るんだよ。」

有無を言わずシンジの手を引き、独房からなかば強引に連れだすミエコ。

「ミエコさんちょっと待ってください。今ここを出る訳には行かないんです。」

ミエコの手を振りほどくシンジ。

「うるさい！私はアンタを助けに来たわけじゃないんだ。アンタと最後の決着をつける為に来たのさ。四の五の言っんじゃないよ。」

シンジをキッと睨むミエコ。

「最後……………」

暗い顔になるシンジ。そんな事はお構い無しにシンジの手を強引に引っ張り、駆け出すミエコ。シンジは素直について行くしかなかった。

「撃ち方用意！」

ゲンさんの号令と共に幾本ものライトが点灯する。

「……………！！！」

施設から出てきたシンジとミエコの前に立ち塞がるのはゲンさん率いる特殊機動歩兵部隊の姿だった。

「簡単に出られると思ってたのかい？お二人さん。」

ライトを背にムラカミがシンジとミエコ、二人の前にゆっくり歩いてきた。

「ふん！そんなこつたろうと思ってたよ。」

両のサーベルを具現化させて臨戦体勢をとるミエコ。

「ミエコさん。ここは僕に任せて下さい。」

ミエコをかばうように前に出るシンジ。

「おやおや、仲間じゃなかった筈だが。」

シンジを見下した表情を浮かべるムラカミ。

「ミエコさん、ちょっと失礼します。」

ムラカミを見据えながら、いきなりミエコを抱きかかえるシンジ。

「馬鹿、何すんだよアンタ。」

シンジの突然の行動に驚くミエコは形式的に抵抗する。

「しっかり捕まってく下さい。」

ムラカミに背を向けるシンジ。その行動に戸惑うムラカミ。

「うおーー！」

出口とは逆方向に駆け出すシンジ。

「逃がすな、追い込め！」

ムラカミの指示で動き出す特殊機動歩兵部隊。シンジは施設の二階の壁に跳躍し、片足を壁にめり込ませ、三角蹴りの要領で更に跳躍を繰り返す。

そしていつそく跳びに敷地の外に飛び出した。虚をつかれたムラカミは天を仰ぐ。

「しまった！タクマ、そっちに行ったぞ。」

とつさに無線で連絡を取るムラカミ。

「えっ、どこですか？」

敷地外で待機していたタクマは辺りを見回す。

「上だ、上から来るぞ！」

「ええっ上？」

ムラカミに言われるまま上空を見上げるタクマ。

ザザーッ！

シンジはタクマの頭上を越え着地。勢い余って両足でブレーキをかける。

「おおっ！なんと。」

目を丸くするタクマ。体勢を持ち直したシンジはそのまま駆け出す。

「わわわっ。」

あわてふためき銃を構えるタクマ。

ボンッ！

なぜかタクマが構えた銃が暴発した。

「熱っ、あっつー。」

タクマは暴発した銃を捨て標的を確認する。遠ざかるシンジの肩越しにサーベルの剣先をタクマに向け、殺気を放つミエコの姿。

「ひええっ。」

タクマは腰を抜かしその場に座りこんだ。

「タクマ！」

息を切らし、ムラカミが駆け付けてきた。

「どうした。」

「すみませ〜ん。残念ながら……。」

怯えた表情でムラカミを見上げるタクマ。

「くそっ、やられたか。」

鬼の形相でシンジが駆け抜けた先を睨むムラカミだった。

「すごいね彼。」

シンジが蹴った壁を見上げ、ゲンさんが感嘆の声を洩らす。

「うゝん男として尊敬しちゃうね。」

「本当ですね。」

コンノが相槌をうつ。

「おう。アイツがとても凶悪犯とは思えねえな。男の中の男だよ、ありゃあ。」

「俺もそう思います。」

ゲンさんに賛同するコンノ。

「彼とはやりあいたくないですね。」

そしてコンノは自分の本音をゲンさんに告げる。

「そうは言っただってなあ、上から命令がありゃあ攻撃するしかねえからな。」

ため息まじりにゲンさんがぼやく。

「そこが辛いとこなんですよねえ。まあ、そうならない事を願いますよ。」

顔を見合わせニヤリと笑う二人。

脱出を果たしたシンジとミエコは、月明かりと街灯が照らす街路をひた走っていた。

「降ろしてよ。」

ミエコが顔を真っ赤にして小声でつぶやく。

「はい？」

前だけを向きひたすら駆けるシンジ。そっけない返答にムツとするミエコ。

「降ろせ！」

明確な意思を示すミエコ。

「あ、はい。」

立ちどまってミエコを降ろそうとするシンジ。しかしミエコはシンジの肩をギュッと抱きしめ、なかなか離そうとしない。

「ミエコさん？」

困惑するシンジ。沈黙するミエコ。

「よし！ひとつだけ教えてやる。」

シンジを見上げる悪戯な瞳。

「えっ。」

キョトンとするシンジ。

「アンタ。自分の手をよく見てみな。」

「手を、ですか？」

シンジはミエコに言われるまま右手を広げてみた。

「手がどうかしましたか？」

「いいからもつと神経を集中して、見つめてごらんって。」

シンジは意識を集中して右手を見つめる。するとシンジの右手から出たり引つ込んだりする光が見える。

（何だこれは………？）

シンジは食いいるように自分の手のひらを見つめる。

「見えたかい？それがアンタのオーラさ。」

「オーラ？」

「アンタを初めて見た時はもっと凄かったよ。虹色のオーラがうまくってさ。」

苦笑するミエコ。

「だからか。だから僕がウルトラマンって事がばれていたのか。」

今までの出来事に合点がいった様子のシンジ。

「くっ、僕はとんだピエロだ。自分の事も知らずに。」

自身を恥じるシンジ。

「そうだね、アンタはピエロだ。でもアンタをピエロに仕立てたのは誰だい？」

自身を責めるシンジをやさしく諭すミエコ。

「・・・・・・・・！」

事が単純な話ではない事に気付くシンジ。

「光の戦士であるアンタ達は例外なく光のオーラを発している。だけど皆そのオーラを押さえる術も知ってる筈なのさ。」

腕を組み、淡々と話を続けるミエコ。

「なのにアンタは知らない。これがどういう意味か分かるかい？」

ミエコの言葉に息を飲むシンジ。月がシンジの気持ちを現すかの様にゆっくり雲に隠れてゆく。

「事実上の死刑執行さ。」

ミエコの言葉に顔面蒼白になるシンジ。

「何かの事情でアンタの事が邪魔になったんだろうね。」

口を開きかけたシンジをさえぎり、話を続けるミエコ。

「自らの手は汚さずに敵に始末してもらつ。私が言つのも何だけど見下げ果てた奴らだね。アンタの一族は。」

「有り得ない……。」

声を絞り出すシンジ。

「有り得ません！そんな事！」

そして強く否定する。

「ふうん。アンタの頭は石で出来てるんだねえ。アンタと私が手を組む材料がこれだけ揃ってるっていうのにさ。」

全てを達観した様子のミエコ。

「まあいいさ。私は降りる事にするよ。」

「降りるって何から……。」

一方的に話を進めるミエコに疑問を投げかけるシンジ。

「アンタの争奪合戦から降りるんだよ。」

「争奪戦？」

話が見えないシンジ。

「一族に捨てられたアンタを拾おうといろんな奴らが躍起になってる。私も私の一族の為にアンタという戦力が欲しかった。けど・
・・・。」

寂しく笑うミエコ。

「お喋りは終わりだ。アンタが仲間にならないのなら、私は死んだ子分達の仇を討たなきゃならない。」

両のサーベルを具現化し、マグマ星人の姿に変身していくミエコ。身構えるシンジ。

「勝負だ！」

マグマ星人の宣戦布告に応え、イオの姿に変身するシンジ。背の高いビルが立ち並ぶオフィス街で真夜中の決闘が始まった！

5 - 2 「孤立」

「隊長。マグマ星人の所在が判明しました。立川市商業B地区で戦闘を行っているとの事です。」

ガイズ本部に通報が入り、隊員達が動き出す。

「ようし、必ず始末してやる。みんな、気合い入れて行け！」

「了解！」

ムラカミ隊長の号令のもと団結するクルー・ガイズ。そんな中、コンノだけは浮かない顔をしていた。

ガキン！ガキン！ガキン！

「ほら！どうした！この間と一緒かい？」

マグマ星人の鋭い暫撃に防戦一方のイオ。オフィスビルの二画がすでに穴だらけになっている。

（あの時とまるで同じだ。ミエコさんの攻撃には隙がない。ただけと同じ轍を踏む訳にはいかない！）

「おおりゃあ！」

攻めこむマグマ星人を渾身の力で押し返すイオ。

ドガンー!!

マグマ星人はビル壁を崩し背中を強打する。

「なるほど。私の子分達は決して弱くはない。大したもんだよ。やっぱりアンタも光の戦士って事なんだろうね。」

マグマ星人はうつすら笑い、ビルの中に姿を隠す。一枚の壁を挟んで相対する両者。

(どこだ、どこから来る?)

イオは周囲を警戒する。

ザン！ザン！ザン！

イオの真後ろの壁が碁盤の目に刻まれ、コンクリート塊が矢継ぎ早に打ち出されていく。

(何のつもりだ?)

コンクリート塊を払うイオ。その隙に飛び出す黒い影。

「よそ見してる暇はないよ!」

マグマ星人はコンクリート塊で死角を作り、イオの左肩を貫いた。

「痛うつ!」

左肩を押さえるイオ。マグマ星人は再び姿を消す。

ザン！ザン！ザン！

そして再度、碁盤の目に刻まれていく壁。

（このままじゃ不利だ。）

たまらず巨大化するイオ。皮肉に満ちた笑いを浮かべマグマ星人も後に続く。

「狭い場所は苦手かい？」

マグマ星人は余裕しゃくしゃくといった様子だ。

「いたぞ、あそこだ。」

ガイズ車輛で現場に到着したコンノ率いる地上部隊。空からはムラカミとムロタがガイズウィングで急襲する。

（変だ。奴のオーラが僅かながら復活している。なるべく早く誰かに犠牲になってもらうしかないな。）

イオの姿を確認したムラカミはすぐさま思考を巡らせる。

「コンノ、この間の戦闘を覚えているな。ウルトラマンの戦闘能力は凄まじいものがある。我々だけではとても太刀打ち出来ない。」

「はい。」

機動歩兵部隊に攻撃体勢を整わせながら無線でムラカミと連絡を取るコンノ。傍らにはゲンさんもいる。

「そこで前回同様我々はウルトラマンに攻撃を集中する。マグマ星人は後回しだ。」

ムラカミの命令に困窮するコンノ。そんなコンノを察して肩を叩くゲンさん。

「了解……………」

軍隊において上司の命令というのは絶対服従が常である。ガイズもまた例外ではなかった。

「壁が有ろうが無かろうが関係ないんだよ。」

そう言うつとマグマ星人は右のサーベルで建築物を片っ端から刻み始めた。そして破片を器用に巻き散らしイオの視界を塞ぐ。

イオは顔をガードしてマグマ星人の足元に目を配らせ動きを察知しようとしている。しかし……………。

「食らえ！」

ドン！ドン！ドン！

左のサーベルの剣先をイオに向け火球を放つマグマ星人。計三発打ち出されたマグマ弾はエネルギーシールドを張っていないイオの五体に全て命中した。

「ううっ！」

がつくりと右膝をつくイオ。

ドン！ドン！ドン！

マグマ星人はチャンスと見るや、すぐさま右のサーベルからマグマ弾を放つ。イオの顔面間近に迫る真つ赤に燃えたぎる火の球。

（まずい！）

ドン・・・・・・・・。。

間一発イオはエネルギーシールドを張り、守りを固めた。

「うらあ！」

ドス！ドス！ドス！

シールドの上からおかまいなしにマグマ弾を連打するマグマ星人。

「チッ、亀か。」

破る事の叶わないシールドに舌うちし、マグマ星人はサーベルを下げた。その時！

ドカーン！！

隙だらけのイオの背中にスペシウム弾頭弾が炸裂した。ムラカミとムロタが搭乗するガイズウィングからの攻撃である。

前のめりになり突っ伏すイオ。ニヤリと笑うムラカミ、そして目を細め怪訝な表情をするマグマ星人。

「どうやらアイツらは私の味方らしい。アンタも大分嫌われたもんだ。」

再びサーベルを構え、マグマ星人は銃撃の体勢を取る。

「きえーっ！」

マグマ星人は奇声を発し、両のサーベルを交互に突きだしマグマ弾を連発させる。

（まずい、守りに徹すると殺られる！）

イオは突っ伏したまま左腕で顔面をガード。そして右腕に必殺技の光を蓄える。

「スプリット・ブレイク！」

火球を切り裂き、砕きながら一直線にマグマ星人に向かって行く光の白刃！

「ひっ・・・・・・・・・・！」

驚きのあまり体を硬直させるマグマ星人。

グオーン……………。

マグマ星人の顔面をかすめ、光の白刃は宙に消えた。表情を凍てつかせていたマグマ星人は我に返り、うつ向く。

「そうか、遠距離攻撃はアンタらの十八番だったね。それなら！」

顔をあげ、イオを睨みつけるマグマ星人。

「取っ組み合いだ！」

マグマ星人はサーベルを構え、イオに飛びかかった。

ガキン！ガキン！ガキン！

サーベル攻撃を受け流すイオ。

（見える。あんなに鋭かった踏み込みが今はハッキリ見える。目が馴れてきたのか？それともミエコさんが心を乱しているのか？）

マグマ星人の暫撃を見切ったイオは腕を掴み必殺の一本背負い！

「そりゃー！」

ズバーン！

背中から思いきり地上に叩きつけられたマグマ星人は宙を仰ぎ、

自信を喪失した。

「・・・・・・・・くそつたれ！」

ヤケになったマグマ星人がめくらめつぽう撃ちまくる。そして放たれたマグマ弾はコンノら地上部隊をも襲う。

（あれは！）

自分を信じると言ったコンノを発見し、すかさず盾となるイオ。

ドカンッ！

イオの背中が黒く焼け焦げ、その苦痛に耐えている。

「間違いない・・・・・・・・。アイツは俺らの味方だ。」

イオの顔を見上げ確信するコンノ。

「ゲンさん！」

「よっしゃ！」

一斉にマグマ星人に向けられる砲撃。その光景にムラカミの顔が歪む。

「何をしているコンノ！ウルトラマンを攻撃しろ！」

「出来ません！」

「なんだと……」

「たった今、彼に命を救われました。命の恩人に刃を向ける事は出来ません。地上部隊はこれよりウルトラマンを援護します。」

「コンノ、貴様。俺に盾つく気か。」

ムラカミ機を見上げるコンノ。そしてムラカミとコンノのやりとりを傍受していた諜報部タクマが動く。

「これはいけませんね。」

「ええい！一体どっちの味方なんだいコイツらは、うつとおいしい！」

機動歩兵部隊の攻撃に後退し、一際背の高いビル陰に身を隠すマグマ星人。イオは全身に火傷を負いながらも凜としてファイティング・ポーズを取る。

「まだまだ！」

焦りの色を隠せないマグマ星人が飛び出してきた。

「このおー！」

側転からの前方宙返りでイオの背後に回りこみ、振り向きざまにバックハンドブロー！

バシッ！

そして顔面を殴打され、体勢を崩したイオに真下からサーベルを突きあげる！

ガキーン！

イオは腕をクロスさせ、顔面間近、ギリギリのところを受け止めた。いや、受け止めさせられた。

「私はアンタを独り占めしたくなった。でもそれは叶わない私の欲望。だから私はアンタを諦める。」

イオの顔を見上げ、本心を打ち明けるマグマ星人。

「だけど、アンタを他の奴らに渡しはしない！」

サーベルの切っ先から炎が立ち込める。

ドガンッ！！

特大のマグマ弾が至近距離からイオの顔面に炸裂した。顔を覆いふらふらとよろけるイオ。マグマ星人は肩で息をして、悲しげな表情を浮かべている。

「よし、ムロタ。今だ！」

「アルタイド・ブレイザー！」

ピンチのイオに対して追い討ちをかけるムラカミ、ムロタの空軍。

「ゲンさん！」

「お、おうよ！」

だがムラカミらの攻撃を阻止すべく地上部隊が迎撃する。

ドカーン！

ガイズウイングが放ったレーザー砲はイオに届く事なく地上部隊の砲弾を爆破させるにとどまった。

「コンノ！貴様いい加減にしろ！何を考えてるんだ！」

激怒するムラカミ。クルー・ガイズはその機能を停止した……
・。と、そこへコンドウ司令からムラカミに通信が入る。

「ムラカミ君、そこまでだ。たった今、諜報部トップのタクマ君が自供した。彼は業務上過失致死でこれから罪に問われる事になる。」

「何っ……………」

想定外の展開に硬直するムラカミ。

「タクマ君はこれ以上君に嘘の証言をさせるのが忍びないと言っていたよ。」

「嘘の証言……………」

司令の言葉から何が起きたのかを推し量ろうとするムラカミ。

「部下をかばおうとする君の気持ちは分かるが事実をねじ曲げてはいかん。君にも偽証の罪を償ってもらいますよ。」

（タクマめ、自ら罪を被ったか……。余計な真似を！）

事の顛末を理解したムラカミは顔を歪める。

「そして容疑者、アリノシンジはシロだ。攻撃を加える事は許されない。」

「わっ、分かりました。」

泣く泣く攻撃をあきらめるムラカミ。戦闘区域から離れて行くガイズ・ウイングを確認してイオが最後の勝負を賭ける。

「うおー！」

雄叫びをあげてマグマ星人に突進するイオ。気合いのこもったイオの拳はマグマ星人の剣術をことごとくはね返す。

「せい！せい！せい！せやあー！」

イオ渾身の正拳がマグマ星人の溝落ちに決まった。血へどを吐き、吹っ飛ぶマグマ星人。

「くそっ！」

精魂尽き果て、膝をつくマグマ星人。その目のまえで右腕を胸に

あてがい、必殺技「スプリット・ブレイク」の体勢をとるイオ。

「ふふ……」

力なく笑い、こうべを垂れるマグマ星人。イオの右腕に光が走る。

「何をしてるんだい？ 殺せ！ 私は負けたんだ。敗者に生きる道は無い！」

構えをとったままマグマ星人を見つめるイオ。

「生きて下さい！」

イオは携えていた光を消し去り、構えを解く。

「僕もあなたに一度負けました。何が違うんですか！」

マグマ星人はうつ向いたまま沈黙している。

「司令、マグマ星人を殲滅します。異論はないですね。」

沈黙を破り、ムラカミ機が攻撃体勢に入る。

「ムロタ、俺に続け！」

マグマ星人に対して攻撃を仕掛ける二機のガイズ・ウイング。しかし、イオが両手を広げマグマ星人をかばう。

「くそ！」

届かない攻撃に苛立つムラカミ。

「司令、ウルトラマンに対しての攻撃を許可して下さい！」

「駄目だ。彼は我々に危害を加える意思はない。」

「しかし、このままではマグマ星人を討てません！」

「ムラカミ君。勝負はすでについている。後は彼に任せるんだ。」

「そんなバカな。」

落胆するムラカミ。そして何かを決意した顔を浮かべ、瞳を閉じた。するとみるみる内に体中の血管が浮かびあがる。

「ふはあ！」

気を開放するムラカミ。程なく浮かびあがった全身の血管が細い管と化し、コクピット中に突き刺さる。

「×○……………」

人間には発音不可能な言葉を発し、血管からエネルギーを送り出す。機械の箱でしかなかったコクピットが有機物質に変化し、ドクドクと脈をうち始める。

「君は邪魔なんだよ。」

ムラカミ機が鳥の羽ばたきの軌跡を描き、イオの腕をすり抜ける。

「死ね！」

キラリと目を光らせ、体内からエネルギーを送り出すムラカミ。そしてガイズ・ウイングの砲身から放たれる漆黒のエネルギー弾。

（危ない！）

イオは腕を発光させ、エネルギー弾を弾く。拡散するエネルギー弾。しかし、完全に勢いを断ち切る事は叶わず流れ弾がマグマ星人の喉元を捕える。

「うがつ！」

苦悶の表情を浮かべて、のたうち回るマグマ星人。

「あ、あゝ！」

仰向けに倒れて喉を押さえ、右手を宙につき出すマグマ星人。

「ミエコさん！」

イオはマグマ星人に手を差しのべる。手と手がほんのわずか一瞬だけ触れ合った。そして人のサイズに戻ってゆくマグマ星人。

（よくも！）

ムラカミ機を睨みつけるイオ。ムラカミもまたイオに対して殺意に満ちた目を向ける。いつのまにかコクピットの有機物質はきれいになくなっていた。

「ムロタ！引き上げるぞ。」

「ういっす。」

イオを残し帰還する二機のガイズ・ウイング。イオもまた人の姿に還ってゆく。

無人の廃工場。喉をかきむしり、もがき苦しむミエコ。やがて痛みが収まり落ち着きを取り戻していく。

「・・・・・・・・！！」

そして声が出なくなっている事に気がつき、呆然とする。

（許さない！あの男。監視者よ見ていろ、私は絶対に報復する！）

怒り心頭のミエコは復讐を誓い姿を消す。

ガイズ司令室。コンドウ司令が難しい顔をして机の上を眺めている。机の上には辞表と書かれた封書が置かれていて、ムラカミが司令に対して深々と頭を下げている。

「という事は何かね。君は自らの責任を取って隊長の座を降り、ガイズも辞めると、そういう解釈でいいのかね。」

辞表を開封する事なくムラカミの意思を確認する司令。

「・・・・・・・・はい。」

暗い表情で答えるムラカミ。そしてしばしの沈黙・・・・・・・・。

「甘ったれるんじゃない!!」

思いきり机を叩き、檄を飛ばす司令。驚き顔あげるムラカミ。

「君はそんな弱い人間だったのかね。」

「すみません。」

悲しげな表情の司令に対して再度、頭を下げるムラカミ。

「ムラカミ君。私はね、この組織に入隊する前に遺書を書いた。
そして辞職する時は死ぬ時と覚悟している。」

「・・・・・・・・。」

頭を下げたまま無言で司令の言葉に耳を傾けるムラカミ。

「君だつてそうじゃないのかね。」

ムラカミの辞表を手に取り破り捨てる司令。

「とにかく、責任の取り方が間違つてはいないか、頭を冷やしてよく考えたまえ。」

ムラカミに背を向ける司令。面を上げないムラカミ。その表情は

伺い知る事が出来ないままである。

東京拘置所。自ら進んで罪を償うタクマにムラカミが面会に訪れていた。

「・・・・・・・・。」

殊勝な面持ちでうつ向くタクマ。ムラカミは両の拳を握り怒りに震えている。

「どういっつもりだ。タクマ。」

ムラカミの問いかけに口元を緩ませ笑顔を作るタクマ。

「失敗したんですよ、隊長。」

口を真一文字に結び、タクマを見据えるムラカミ。

「奴のオーラは消えてなかった。それは認めて下さい。」

「・・・・・・・・そうだな。」

惘然とした態度で渋々納得するムラカミ。

「それなら、もう一度やり直しましょう。ヤケになってもしょうがないじゃないですか。」

「しかし。」

「しかし、じゃありません。誰の為に私が犠牲になったと思ってるんですか？」

ムラカミに対して罵声を浴びせるタクマ。

「あのまま無理強いを続けてごらんさい。あなたはすでに隊長の座も、部下の信頼も失ってますよ。それでも良かったんですか？」

弱い立場の人間にはめっぽう強いタクマが本領を発揮する。

「済まなかった。」

湯だった頭に冷水をかけられ、小型犬のようにおとなしくなるムラカミ。

「すみません。言い過ぎましたね。」

「いや、お前の言う通りだ。」

勝ち誇るタクマ。ムラカミはタクマから目をそらしている。

「そこで考えたんですが、こういふのはどうでしょう……」

タクマがムラカミに耳うちする。熱心に聞きいるムラカミ。やがてムラカミから笑みがこぼれた。

「なるほど。」

良からぬ計画を人知れず企てる二人。シンジの前途に暗雲が立ちこめてゆく。

5 - 2 「孤立」 (後書き)

「マグマ星人編」 完結！ 次回「ポール星人編」 突入！

6 - 1 「社会」

「釣れないな………」

東京湾に面した湾岸地区の一角、人工的に埋め立てられたこの場所
で孤高の男「シンジ」は釣りをしながら考え込んでいた。

（僕はこの惑星の人間を守る為に送られてきた。僕らと同じ進化を
遂げるかも知れない地球人。だからこそ守っていかねばいけない。
でも果たしてそうなのだろうか？ 同族同士でいがみあい、殺し合う。
本当にそんな地球人がウルトラマンになり得るのだろうか？）

「兄ちゃん、なんか釣れるかい？」

しかめっ面をして、釣り糸を見つめるシンジに作業服の男が声を
かけてきた。

「いえ、全く」

「そりゃそうだろうよ、こんなところで釣れるのはヒトデか長靴く
らいなもんさ」

「はあ、そうなんですか」

男の冗談に真顔で答えるシンジ。作業服の男は笑いながらシンジ
の隣に腰を降ろす。

「兄ちゃん、毎日そこに座ってるけど、そんなに暇なのかい？」

「はい、けっこう」

「なら、うちで働いてみちゃどうだい？ いや若い奴がやめちま
ってね」

そう言いながら持っていた缶コーヒーをシンジに差し出す作業服
の男。

シンジが働き出したのは冷凍食品倉庫内でのアルバイト。真夏だ
というのに厚着をして巨大な冷蔵庫の中で汗して働くという一風変
わった仕事である。

「フジキさん。この荷物はここでいいですか？」

「ああ、そこに置いといてくれ」

フジキと呼ばれた男はシンジを仕事に誘った作業服の男である。
そのフジキの隣にはネクタイを締めた事務方の男が立っていた。二
人してシンジの仕事ぶりを熱心に見守っている。

「ヒトツギさん。どうだい彼、よく働くだろ」

フジキがしたり顔で事務方の男に声をかける。

「どこで拾ってきたんですか、あんな若い子を」

「いやね、うちの倉庫の裏で毎日ぼけっつとしてるからさ、気になって声かけてみたんだよ」

「本当に拾ってきたんですね。ハハハ」

ヒトツギと呼ばれた事務方の男は、苦笑いを浮かべながらも眼光鋭くシンジの事を見つめていた。

生き生きとした顔で仕事をこなすシンジ。しばらく鬱々とした日々を送っていたシンジは身体を動かす事、誰かと触れ合う事で元氣を取り戻していた。

「おいおい、いつになったら終わるんだよ」

「すみません、すぐ片付けます」

元気に働くシンジのすぐそばで作業員同士がなにか、もめている。シンジはその不協和音に敏感に反応し、事の成り行きを静かに見守る事にした。どうやら背の低い作業員が仕事の邪魔になっているようだ。

「いいよ、邪魔だ。どけ！」

背の低い作業員に文句をつけた大柄な男は、あろうことか小柄なその若者を乱暴に突き飛ばした。

ガラガラガラーン……………。

小柄な若者が抱えていた小荷物が突き飛ばされた拍子に床に転がってゆく。

「おおっと、危ないよ」

そして転がった荷物を別の作業員がわざと蹴飛ばして更に散乱させた。

「トロトロしてっからだよ」

その様子を横目にしていた別の作業員は、さも当然だという調子で罵る。小柄な若者は必死になって自分の荷物を拾い集めようとしている。その哀れな姿に周りの作業員達のほとんどが馬鹿にした笑いを浮かべていた。

（……くそ！ どこへ行ってもこんな状態か。なぜなんだ、なぜ弱者を虐げる。なぜ分かり合おうとしないんだ！）

シンジはいじめられている若者を見て、いきどおりを覚えていた。そして自分の仕事を放り出し、その若者の元へと駆け寄った。

「大丈夫ですか」

散乱する荷物をいくつか拾い集め、若者へと手渡すシンジ。

「あ、いいんです。僕、こういうの慣れてるんです」

その若者はシンジと目を合わせようとせず下を向き、荷物を受け取ろうとした。だが……。

「おつとごめんよ、邪魔だからどいてね」

カラカラン・・・・・・・・。

わざとらしくシンジにぶつかる意地の悪い作業員。若者が受け取るうとした荷物が再び床に転がってしまった。

「あの、行ってください。かわりあいにならない方がいいですよ」

何事もなかったかのように再度荷物を拾い集める若者は、顔色一つ変えずにシンジに耳打ちする。

「くっ・・・・・・・・！」

その若者に、そして周りの作業員達に我慢できなくなったシンジはとうとう立ち上がり、怒りをあらわにした。

「ちょっと待て！」

シンジは自分にぶつかってきた意地の悪い作業員を大声で呼び止めた。

「何だ、何だ。どうした？」

周りの作業員達がシンジの大声に振り返り、一斉にざわつき始めた。

「なぜこんな嫌がらせをするんだ！」

「はあ、何………」

シンジのあまりの剣幕に、呼び止められた作業員はおもわず固まっ
ってしまっている。

「君らは同じ現場で働く仲間じゃないのか？ その仲間に対して
こんな仕打ちをするのか！」

思考の停止した作業員に理論立てて説法を説くシンジ。その言い
方が気に入らなかったのだろうか、作業員の顔が怒りに歪んでゆく。

「何、その上から目線は？ 仲間じゃねえよそんな奴、てかお前、
新入りのくせに生意気だな」

言うが同時にシンジに掴みかかろうとする作業員。だが逆にシン
ジに軽くないなされ、後ろ手に捻りあげられてしまった。

「痛てててつ、くそ！ この野郎！」

「うわっ、最悪っー」

シンジにあしらわれている作業員の滑稽な姿を見て、一斉に笑い
出す他の作業員達。

「おい、お前ら。新入りになめられてもいいのか！」

自分が不利になったので仲間を煽る作業員。シンジはその発言に
更にいきどおりを感じてしまう。そして騒ぎの発端となった大柄な
男がシンジの前に出てきた。

「おい新人君よ、正義感ふりかざすのは勝手だけだなあ。お前、ちよつとウザイよ」

「おっいいぞ、やれやれー」

「どつちもがんばれよ！」

周りの作業員達が一触即発の二人をまくしたてる。現場はすでに大騒ぎになっていた。その騒ぎに気付いたフジキとヒトツギが慌ててやってきた。

「お前ら、やめろやめろ！」

大騒ぎになった現場をフジキが制止する。

「フジキさん。若い奴が辞めたって言ってましたけどこんな職場じゃ当たり前じゃないですか」

仲裁に入ったフジキに対しても噛みつくシンジ。フジキは申し訳ないといった表情を浮かべてシンジから目をそらす。

「アリノ君、落ち着いて。いいから、ちよつと外に出よう、ねっ」

興奮気味のシンジの手を引き、ヒトツギがシンジを外に連れ出した。

「これで分かったでしょう」

会社の敷地の外までシンジを連れ出したヒトツギは含みのある物言いをした。

「はあ、何がでしょうか？」

なかなか怒りの収まらないシンジはぶっきらぼうに返答する。

「これが人間の本性なんですよ」

「本性……?」

シンジは不思議そうな顔をしてヒトツギの言葉に耳を傾ける。

「弱い者は排除され、強い者だけが生き残る。弱肉強食、子供の喧嘩から経済に至るまで、全てにおいてその法則は同じなんです」

「弱者が排除されるのは当たり前だと、そう言いたいのですか」

いじめを肯定するようなヒトツギの発言に激しく反発をするシンジ。

「まあまあ、落ち着いてください。今はそんな小さな事は問題じゃありません」

ヒトツギの落ち着いた口調にシンジも落ち着きを取り戻し、幾分表情が和らいできていた。

「いいですか？ 今あなたに分かっていたきたいのは、弱者は常に強者の犠牲になっているという点です」

「はあ、それは分かりますが……」

シンジのその言葉を待ってヒトツギはせつせつと語りだす。

「この惑星に生きる生物は己より弱い者を糧として生きています。仕方ありません。生きてゆく為には当然の事です」

こくりと小さく頷くシンジ。

「しかしながら、人間の社会というものはただ生きてゆく為のみならず、自らをそして国家を豊かにする為に貪欲に地球資源を搾取し、自然環境を破壊しながら今日まで発展して来ました。果たしてこれが正しい生物の在り方なのでしょうか？」

ヒトツギの喋りが政治家の演説のようになってきた。

「つまり人間社会は我欲の為に、この惑星そのものまで犠牲にしようとしているのです」

「そんな馬鹿な」

「いいえ、多くのメディアが語っています。このままだとこの惑星は砂漠の惑星になりますよ。間違った覇者の為にね」

職場内の小さないさかいから地球規模の大きな話になり目を白黒させるシンジ。

「そうなのでもいいと思いますか？」

ヒトツギは穏やかな目で問いかける。

「いや、そんな事にはならないでしょう」

大袈裟とも思えるヒトツギの主張にシンジは少したしなめる為に反論してみせた。

「何を甘い事を言ってるんですか。いいですか、世界規模の話し合いを何度開いても小さな島国ひとつ救えない、それどころか醜い責任のなすりあい終始する始末。こんな方々に未来を任せられませんか？ いいえ無理です。だからこそ立ち上がらなければならない、行動を起こさなければならないのです」

使命感に燃えたヒトツギの言葉にただただ、圧倒されるシンジ。

「我々はこれからこの惑星を凍結させて太陽光線から一時保護します。君にも我々の同士になってもらい作業の妨げになるものを排除してもらいたい」

藪から棒に訳のわからない発言をするヒトツギ。

「凍結させて保護する？ 同士？ どういう意味ですか？」

「もつと視野を広げてください。凍結といってもなにも全ての生物が死滅するわけではありません。生命力の強い者は必ず生き残ります。むしろ人類もです。そしてこの教訓を生かし、今より優れた存在として人類は成長するのです。どこにも悪い話はありません」

シンジの問いに答える事はせず、説得じみた言葉をかぶせてくるヒトツギ。

「今より優れた存在……」

ヒトツギの演説然とした話の中に真理を感じたシンジは一瞬考え込む。

（そうか、多くの困難をくぐり抜けた先に人類の成長があるのかも
しれないな）

「もう時間がないんですよ」

考え込むシンジの肩をグッと掴むヒトツギ。

「お願いだ！私に協力すると言ってくれ！でないと我々は戦わざ
るをえない！」

「ちょっとヒトツギさん、何の話ですか？」

ヒトツギの懇願する姿に気圧され、訳が分からなくなるシンジ。
そして話し合いの結末が突然訪れてしまった。

チューーーーン！

耳をつんざく電子音！シンジの目の前で白目を剥き、バタリと崩
れ落ちるヒトツギ。

「ヒトツギさん！」

何者かの発砲により頭部を撃ち抜かれたヒトツギ。使命感に燃え
ていた命がたった今、儚く……。散ってしまった。予期せぬ
出来事にわなわなと震えるシンジ。そんなシンジの耳にとびこんで

きたのは聞き覚えのある声だった。

「大丈夫か？ 君！」

声のする方向に顔を向けるシンジ。銃を片手にシンジに駆け寄る人影。ヒトツギの命を奪ったのはシンジも見知ったクルー・ガイズ隊長のムラカミであった。

「何だ、君か」

ムラカミはシンジの顔を確認すると、どういわけか呆れた顔をした。

「なぜ、殺した……………」

シンジは憎悪に満ちたまなざしでムラカミを睨みつける。

「なぜ、お前は簡単に人を殺す事ができるんだ！」

激昂し、ムラカミの襟首を掴むシンジ。一方、襟首を掴まれたムラカミは苦虫を噛み潰した様な顔でシンジを見下ろしている。

「何を言っている？ 死体をよく見ろ！」

ムラカミに言われるまま、ヒトツギの死体に目を向けてみるシンジ。

「これは……………!？」

驚くシンジの視線の先には首のないヒトツギの胴体と、全長40

センチに満たない手足の細い宇宙人らしき者の死体が転がっていた。

6 - 2 「沸点」

「これは……！！？」

驚くシンジの視線の先には首のないヒトツギの胴体と、全長40センチに満たない手足の細い宇宙人らしき者の死体が転がっていた。

「そいつはポール星人だ。過去に二度、地球を氷河期におとしられている。もつとも三度目は失敗したがな」

冷静に語るムラカミはシンジに襟首を掴まれたまま、銃をしまい込む。

「ポール星人……」

ヒトツギの正体が宇宙人だった事にあっけにとられ、シンジは襟首を掴む手を緩めていた。

「君だと知っていたなら撃つ必要はなかったんだがな。我々は再び地球に訪れたポール星人の目的を調べる為に以前から尾行調査を続けていたんだ」

ムラカミがシンジの手を軽く払って言葉を続ける。

「君が一般市民なら責める事はしないが、この場は言わせてもらおう。君のおかげで調査は失敗した。何を争っていたのかは知らんが余計な真似はしないでくれ！」

言われの無い責任を問われたシンジはムラカミに向き直る。

「いや、別に争ってなどいない」

「そうか？ 俺にはポール星人が民間人と争っている様に見えたもんでな。争っていたのでなければ一体何をしていたんだ？」

ムラカミの問いに沈黙するシンジ。

「密談か？」

沈黙するシンジを挑発するムラカミ。

「違う！ 彼は地球を救う為に力を貸してくれと………それだけだ」

ポール星人の本来の目的である地球を凍結するという件は敢えて伏せたシンジ。

「地球を救う？ ポール星人がか？」

ムラカミは額に手を当て、一瞬考える仕草を見せた。しかしすぐに人を嘲った笑みを浮かべる。

「フン、君は甘いな。先日はマグマ星人に騙され、まんまと逃げられた。そして今度はポール星人に丸め込まれようとしている」

厳しい目をして苦言を呈するムラカミ。

「そんな事でウルトラマンが務まるのか？ 正義が守れるのか！」

正義を語るムラカミに怒りを覚えるシンジ。

「騙されてなどいない、彼らの方が君達より正直だ！」

シンジの反論を受け、再び苦虫を潰したかの顔をするムラカミ。

「どうも君とは反りが合わないようだ。ツチャ！ 死体を回収しろ！」

二人から少し離れた場所にいた影の薄いツチャがカプセルを手にとって来た。

「それから君、この間は正体を暴くだと言っていたな。俺の事を宇宙人かなんかだと思っているのか？」

疑いのまなざしでムラカミを見つめるシンジ。

「確かに俺は普通の人間には無い能力を持っている。それに気付いたのはさすがだ。誤解を解く為にもそれが何なのか君には明かしておこう」

おもむろに瞳を閉じ、精神を集中するムラカミ。辺りに不穏な空気を感じたシンジはとっさに身構えた。

（何を身構えている？）

シンジの頭の中に声が聞こえてきた。

（これで分かったと思うが、人間の中には俺の様にまれに特殊な能

力を持つ者が存在する)

シンジの頭の中に響く声。それは紛れもなくムラカミの声であった。

(そういう人間を人類は超能力者と呼んでいる)

ムラカミはそう結ぶと目を開きシンジに対して微笑んだ。

「これが君が感じていた物の正体だ。納得して貰えたかな？」

今ひとつ納得できない顔をしてムラカミから視線を外すシンジ。

「隊長！死体がまだ動いてます！」

頭を射抜かれたポール星人をカプセルに回収したツチヤが首の無い胴体を指し、大声を張りあげる。

「何！」

同時に振り返るシンジとムラカミ。

「銃を抜け！ツチヤ！」

ツチヤに指示を出し、自らも銃を抜くムラカミ。

ズズ・・・・・・・・、ズズ・・・・・・・・。

首の無いヒトツギの胴体が手と膝を地面に着け、ヨロヨロと起き上がろうとしている。なんとも不気味で異様な光景である。そして

銃を構えたムラカミとツチヤは互いにアイ・コンタクトを取り、同時に引き金を引いた。

チュイーン！

発砲と同時にヒトツギのスーツが燃え上がり、何かが飛び出してきた。

「くそ、外したか！」

光弾をすんでの所であわし、逃げ去ろうとしているのは二体のポール星人だった。地上から僅かに浮遊している。

「三体で一人を演じていたのか、頭の悪い奴らだ」

悪態をつくムラカミを尻目に二体のポール星人は風を切り、冷凍倉庫の構内に逃げ込んだ。

「きゃっ！」

構内で立ち話に花を咲かせていた女子社員のスカートがポール星人の起こした突風で舞い上がる。

「何、今の？」

「やだ、誰かに見られなかった？」

顔を見合わせる女子社員。その脇をムラカミとツチヤが駆け抜け

る。

「誰？ あの人達」

「絶対に見られた！ 二人とも鼻の下が伸びてたもん！」

「本当？ きもーい！」

女子社員の言動に動揺しておもわず足がもつれて転びそうになる
ムラカミとツチャだった。

（僕はどうすればいい？）

シンジは迷い、悩んでその場を動けないでいた。

（ポール星人の言葉は真実としか思えない。きっと彼らはこれまで
も、この惑星を救ってきたに違いない）

そう思うとヒトツギの顔が神々しく思えてくる。

（そんなポール星人を地球人は殺そうとしている。いけない！ 話し
合いの余地はあるはずだ）

シンジは駆けだそうとした。しかし別の考えが頭に浮かび、思い
留まる。

（だが今を生きる地球人にとってポール星人は災厄以外の何者でも
ない）

そして次に「ポール星人に丸め込まれようとしている」というムラカミの言葉が頭をよぎった。

（僕はなんて未熟者なんだ。どうやって解決すればいいのか分からない）

堂々巡りを繰り返し、やはりシンジは動けないままだった。

「ツチャ！ 二手に別れるぞ！」

冷凍倉庫内に逃げ込んだポール星人を追いかけるムラカミとツチャ。地下へと続く階段を右と左に別れて駆け降りて行く。

「見つけたらすぐに連絡しろ、いいな！」

「はい、分かってます」

そう言い残すとムラカミは左の階段へ姿を消した。そして右の階段を降りて行くツチャ。静まりかえった倉庫内は少し不気味な雰囲気をもたせている。

「く、来るなら来い！ポール星人！」

自分を鼓舞しながら階段を踏みしめるツチャ。その表情は極度に緊張している。

「あれ？」

地下二階まで降りた所で階段は終わっていた。辺りを見回しても階下に続く道は見つからず隣のホールへの扉があるだけだ。

キイツ。

首をかしげながらも扉を開くツチヤ。

「ん？」

ツチヤが開いた扉の向こうにも地下へと続く階段は無かった。その代わり業務用の大きなエレベーターがあったのでツチヤはそれに目をつけた。

「仕方ない、乗るか」

あまり深く考えずにエレベーターに乗り込むツチヤ。道に迷う人間の典型的行動パターンである。

コツ・・・・・・・・、コツ・・・・・・・・。

一方、ムラカミは最下層まで難なく辿り着いていた。ゆつくりと足音をたて、ポール星人を袋小路に追い詰める。

「ふふふ、かならず尻尾を出すと思っていたぞ」

ムラカミの言葉に観念して姿を現すポール星人。

「この俺から逃れられると思ったか、ポール星人」

ムラカミは両の掌を広げ、ポール星人に向けてかざした。指先に向かつてぞわぞわと血管が浮かびあがり、表皮を突き破ろうとしている。

「待て！ 監視者よ、何の為の同盟だ」

「そうだ！ 我々を裏切るつもりか？ これはれっきとした背任行為だぞ！」

沈黙していた二体のポール星人がぎゃあぎゃああと喚きだした。

「背任行為？ それはこっちの台詞じゃないのか」

口元をゆるませニヤリと笑うムラカミ。

「彼を仲間にする為に結んだ同盟であって地球を氷漬けにする為の同盟ではない、考え違いもはなはだしいと思うがね」

ムラカミの指先に集まった血管が表皮を突き破り、管状に硬化した。うねうねと気味の悪い動きをしている。

「待て、最終的に仲間になれば問題はない筈だ」

「そうだ！ そうなるように我々は動いていた！」

ムラカミの正論に対して飽くまでも強気のポール星人。

「分かり易い嘘をつくんじゃない、裏切り行為は許さん。その為

の監視者だ！」

指先から突き抜けた血管が植物の蔦の様に伸びてゆく。そして二体のポール星人に素早くからみつき、その小さな身体を捕縛した。

「頼む、待ってくれ」

「やめろ、只では済まないぞ！」

苦しむポール星人に対して顔中の血管を浮かびあがらせ、悪鬼の如く笑うムラカミ。

「無駄だ、死ね！」

「ぎゃあああああああ………」

グサリと幾本もの管がポール星人の体に突き刺さった。そして、ズズズと体液を吸いあげてゆく。二体のポール星人はかん高い悲鳴をあげてみるみる内に干からびてしまった。

「フン、地球を凍らせて一体何になると言うのだ。ふはは………
……ふははははははは！」

高らかに笑うムラカミ。しかしポール星人が最後に残した言葉通り、只では済まなかった。

ミシミシ………。

どこからか建物が軋む音がする。

「ん？ 何だ？」

ムラカミは注意深く辺りを見回す。

ゴゴゴゴッ。

身体が揺れる程の振動が最下層のまだ下の方から響いてくる。

「くそ！ とんだ置き土産を残していったか！」

次第に揺れがひどくなる中、ムラカミは脱出する為に出口へと向かった。

「うう、寒い。まずいよなあ、一体ここ、どこだよ」

迷路のような冷凍倉庫の中でツチヤは迷子になっていた。

「隊長に連絡したいけど……絶対怒られるよなあ」

ガタンッ！

突然、建物が大きく揺れ、コンテナの扉が開き中から大量の冷凍食品が溢れ出した。

「うわっ！ 何だ何だ？」

カチカチに凍った冷凍食品が凶器となってツチヤの眼前で飛び交う。

ガチャン、ガチャン。

当たり所が悪ければ致命傷になりかねない鯛やヒラメが舞い踊る。
ツチヤは身を隠す場所を探し出し、なんとかかがみこんだ。

「ヤバイよ、本当にヤバイ。出口、出口はどこなんだよ！」

ゴゴゴゴゴッ。

社屋に亀裂が入る程の大きな揺れ、巻きおこる悲鳴と我先に外へと脱出してくる人々。

（何だ！ 一体何が起こってるんだ！）

渦中の外にいたシンジは事態を飲み込めないでいた。

ドカーン！

冷凍倉庫を突き破り、中からポール星人の切札、凍結怪獣「ガンダー」がその姿を現した。

「クツクルー」

ガンダーは、ひと声鳴くと大きな足で社屋を踏み潰す。

ドカーン！

散乱する瓦礫、巻き上がる粉塵。シンジは両の拳を握り、変身の体勢を取ろうと身構えた。

「助けて！」

ガンダーの一撃で負傷した女性。シンジはその声に気がつき、女性を助けようと駆け出した。だが、シンジより早く女性を抱き起こしたのは冷凍倉庫から脱出してきたムラカミだった。そしてムラカミは厳しい目をしてシンジを睨みつける。

「おい、何をばーっとしているんだ！ こうなつた責任の一端は君にもある。奴を何とかしろ！ でないと湾岸地区一帯が凍りつくぞ！」

ムラカミの激しい非難に唇を噛みしめるシンジ。

「チツ、ふぬけが」

行動を起こさないシンジに舌打ちして、女性を抱えその場から離れるムラカミ。

「おい、アリノー！ 逃げろー！」

シンジの身を案じて親身になってくれたフジキが倉庫から逃げだしてきた。

「フジキさん！」

今度はフジキを救わんと駆け出すシンジ。しかし……………。

「ククルー！」

逃げ惑う人々に向けてガンダーが口を大きく開き、大量の冷凍ガスを吐き出した。

「くっ！」

シンジは反射的に両腕でガードする。そして次の瞬間。

「な、何だ、これは」

只の一瞬、足を止めたシンジの眼前には人の形をした氷の彫像が何体も立ち並ぶ。その表情は皆、苦しみ、悲痛な叫びに満ち満ちていた。

ドクン・・・・・・・・・・。激しい慟哭がシンジの胸を打つ。

「間違ってる・・・・・・・・・・」

ズシン！

カタツムリの様なガンダーの目がギョロリとシンジを捕え、巨大な足で迫ってくる。

バキン！バキン！

ガンダーが歩を進める度に氷の彫像達が次々と砕けていく。つい今しがたまで生きていたとは思えない程に簡単に奪われてゆく命。その守れなかった命に対してシンジは自分のおろかさ、無力さを責めたてる。

ピシ……、ピシピシ……。

ガンダーの起こす震動がフジキの彫像にもヒビを入れてゆく。そして……。

バリーン！

シンジの目の前でフジキの彫像は遂に砕け散ってしまった。刹那、シンジの中にドス黒い感情が流れ込み、傷ついた心の奥底でくすぶっていた怒りの導火線に火が点いた。

「どんな理由があろうと罪のない命を奪っていい訳がない！お前達は間違ってるぞ、ポール星人！」

やるせない怒りを胸にシンジは腕をクロスさせて高々と突き上げる。

「イーーーーオーーーーー！！」

イオに変身したシンジはすぐさまガンダーの身体を片足タックルでひっくり返し、そのまま馬乗りになった。そして鉄拳の雨嵐をガンダーの顔面に狂った様に叩き込む。

「この！ この！ よくも！」

我を忘れて殴り続けるイオ。しかしイオにいいように殴られていたガンダーも馬鹿ではない。両腕をこじ入れてガードを固めてきた。

「クウルルー！」

ガードの上からなおも殴り続けるイオに対してガンダーはひと鳴きすると、ガードの隙間から高圧の冷凍ガスを吐き出した。

「痛っ！」

冷凍ガスを顔面にもろに喰らい、焼けるような痛みと同時に視界を塞がれたイオはたまらずガンダーから飛び退いた。

（まずい、視力が戻らない！ 目がかすむ！）

そして顔面攻撃から逃れたガンダーはふわりと宙に浮き上がり、イオめがけて反撃の高速ダイブ！

「うおっ！」

丈夫で硬い肩口を、高速飛行でイオの顔面に当ててきたガンダー。その衝撃でもんどりうつて倒れるイオ。先程まで優勢だったイオは一転劣勢に立たされてしまった。そして戦闘の様子を遠目から観察していたムラカミが一言つぶやく。

「なんだ、案外頼りにならん奴だな……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5786e/>

ウルトラマンイオ

2010年10月21日22時31分発行